

文芸大賞

異界の人々

笠松町 佐藤 敏則

私の名前は野村慎太郎、昭和八年生まれで今年九十二歳、長年心臓に問題を抱えた孤独な老人である。趣味は俳句と古本探し、今日も医者から勧められている散歩の途中で小さな古本屋を見つけた。「こんな処に前から店があったかなあ」とぶつぶつ独り言を呟きながら私は店に入った。

黒縁の太い眼鏡をかけた店の主人が上目づかいにジロリと、突然声を掛けずに店に来た私を見たり後は知らんぷりを決め込んだ。私にしてみても変に馴れなれしく御世辞など言われるより、ほっておかれた方が有難い。暫く手入れの良い棚を見てみると、尾崎放哉の句集「大空」が目にとまった。放哉は定型の句は詠まなかつたがその人生は破格で放浪の末悲惨な最期を遂げた。然し私の好きな俳人であった。私は帳場の主人に黙って渡した。手にした主人は作者の名を見て「なんだお前もか」と言う様な顔をして少

し笑った様な気がした。しかし直ぐに又元の無愛想な表情に戻って「三百円」と言ったきり、うつむいて帳付けを続けた。支払いを済ませて帰ろうとした時主人の脇机に置かれた昭和八年作製の市内地図が気になって、「この地図は売り物ですか」と聞くと、「欲しかったら、金は要らないからどうぞ」とつつけんどんに言ったきり奥に消えた。

自宅に着くなり地図を丁寧に広げてみた。

昭和八年製のその地図はやはり記述名も古く東海道線の岐阜駅名は岐阜停車場とある。更に驚いたことに市営火葬場の入り口にある地名が子供の頃通称だと思っていた「二軒屋」が正式地名で記されていた。今では幻の地名である。聞いたところでは昔は野原で家が二軒しかなかったので通称で呼ばれていた様だが正式地名とは驚いた。当時の地図は

国家機密と見えて軍関係は言うに及ばず行政の記載もかなり制限してあった。

勿論北一色方面にあった陸軍の六八連隊の連隊名などは論外であった。しかし私にとっては子供時代に忘れられない思い出の詰まった町名がここかしこに出てきて懐かしさが込み上げて来た。

今でこそ岐阜駅の周辺はビルなども建つて綺麗な街並みだが戦前は草の生えた空き地が多く、夜などは街灯も少なく淋しげな場所だった。只、紡績工場が駅の周辺に膨大な土地を占有していて昼夜操業をしていた。

駅の北口に立つて左手の大通りを進むと市電の電停千手堂に到るがその手前に古い大寺があるはずだと確かめるとやはりあった。

それは大堂寺である。それなら寺の横に西に延びる小道があるはずだと探したら矢張り記載されていた。この小道は自宅に帰る時一番近道なのでよく歩いた。私は母と話す時この道を藪の小道と呼んでいた。それは道の右側はほとんど竹藪に覆われていた。左は紡績工場の赤レンガの塀に沿って続いた。

私が父母と三人で終戦一ヶ月前の岐阜の大空襲で焼け出されるまで暮らしていたのは広江町といって左を大正町、右を三島町に挟まれたごく新しい町内である。

三島町は江戸時代から旗本三島本家が持っていた膨大な土地がそのまま町名になった。次の時代にできた大正町は三島町と比較すると家の構え、住人の職業からして見劣りがした。最後にできた広江町に至っては言うまでもない、祭りなどの順番は何時も最後尾で子供も神輿などを担ぐ組から外された。中でも私の露地の家並みはその広江町の中でも差別は際立った。地図を眺めながら苦い思い出や楽しかった少年時代を振り返った。

その夜子供時代の夢を見た。東海道線を南に超えると加納地区で清水川のフナ釣りに夢中になって日が暮れて家路を急いだ。よほどのことでもない日中でも薄暗い藪の小道を夜間通る事はなかったが夢では歩いていた。前方から坂を登って来る屋台に出会った。

母の実家で支那そば屋丸高である。店は大正町にあったが夜は婿養子が岐阜駅前で屋台を置いた。妙な所で嫌いな叔父に会ったもんだと私は思った。この叔父は気分屋で機嫌が悪いとやたら子供を殴った。流石に私に手を上げる事はなかったが、仲の悪い母とはまるで口を利いたことはなかった。私に気が付いた叔父は「慎や、あの坂の上まで車を押せ」と命じた。屋台は食材が満載で重く子供にはかなりの重労働だが仕方がない、魚釣り道具を道端に放り出して屋台の後ろを押しした。

この光景を母が目にしたら大騒ぎになったに違いない。前方に薄汚い身なりの女達が何やらうごめいている。紡績工場から繊維を晒したお湯が決まった時刻に流れ出るのを見計らった様に集まって洗濯をしている一団だ。細い道を大きな屋台が来たので女達は一斉に手を止めて道を譲った。それなのに叔父は一言の礼もなく行き過ぎたので女達は口汚く罵った。私は「ごめんなさい」と何回も謝って通り過ぎた。漸くにして坂の上に出た。

叔父は「慎や、ようやった」と珍しく私を誉めた。お駄賃に小麦粉の付いた練り飴を一本くれた。それにしても叔父は目のつり上がった狐顔で笑うと齒の抜けた口元はまるで腹をすかした狼の様な不気味さであった。思わず夢の中ではあつたが身震いした。

再び道を先に急いだ。竹藪の少し開けた場所に当時としては珍しい白い西洋館があつた。何時もは無人で、母に言わせると代々肺病やみの家系で死に絶えたと言っていた家である。ところが二階の窓から女の子が顔を出して私に声を掛けて来た。

「僕は徹明か、木の本のどちら」何れも小学校の校名でどちらに通学しているかと尋ねたのだ。木の本と答えると、何年生と問い返してきた。一年生と答えると彼女は、「私は徹明の二年生」と言った。然しその顔色はまるで血の

気がなく青白く病人の顔だった。下の部屋から母親の呼ぶ声が、

「トミちゃんお薬の時間よ」と言った。

矢張り病人だ。それも肺病だと私は思った。母が口やかましく言っていた「あの家の前は早く通り過ぎるのやで、それに口に手を当てて息をなるべく止めや」と言っている意味が漸く判った。どうやら空気感染を心配していた様である。今日は何やら不気味な事が多すぎる、早く三島町の大通りに出ないかと気が焦つたが足が思う様に動かない。漸くにして三島本家の黒塀にたどり着いた。然し去年の冬に塀にもたれて死んだ行き倒れ者がいたことを思い出して駆けだした処で夢から覚めた。全身びしょ濡れの汗で気分が悪い。夢の景色はほとんどが体験した事で間違いなかったが思えば当時小道の入り口には自動車修理工場があつたことを思い出した。

勿論国産はなかったので外車の修理で表の看板は白い大きな貝の絵でカタカナでシエルと書かれていた。赤いタンクにも同じマークがあつた。それを見ただけで遠くの外国に行った気がした。

冬の朝など工場の中で大きな乗用車がエンジンを掛けて整備中だったりした。エンジンを吹かすたびにマフラーから青い排気ガスが勢い良く噴出されて道まで流れていた。通学の子

供達ははしゃいでその中を突きつて走った。ガスは何故か甘い香りがした。下校時の子供達は工場の前の道に落ちているねじとかワッシャーを宝物の様に拾い集めた。何時の頃からか工場の脇に木箱が置かれて不要になった自動車部品があった。工場長らしき人が子供達に「坊主、好きなら持つてきな」と許してくれた。私はミラーの欠けたのを貰って後ろの景色が小さく写るのを楽しんだ。当時としては珍しく家からピアノの音が聞こえて来た。誰かが何時も練習していた。余談だがこの家の長男は後に有名な映画監督になった。

この小道の先は三島町の大通りになるが正面には石積み
の忠魂碑があった。この碑から西が広江町になり、この場所
が三島町と広江町の境になった。碑は町内から日清、日露
の戦いに従軍して戦死した英霊を称えたものだった。当然
大人達はむやみに碑に登ることを禁じていたが、子供達は
これを無視して遊び場に使っていた。特に一番高い処に陣取っ
たのは碑の右隣りにある「うどん屋」の長男で町内一の悪
戯鬼である秀が手下を従えて通る者の中に少しでも気に入
らない者を見つけると何かと言いがかりをつけては直ぐに暴
力を振るった。私もあまり良くは思われていないのであるべ
く顔を合わさない様にしていたが意外な話を聞いてから挨
拶ぐらいはする仲になった。事は寺の境内にある大櫓の上
に巣を作っている梟のクロ助の雛が巣穴から落ちた。

カラスに突かれているのを手下が見つけて保護したが後始
末に困った。しかし悪戯鬼秀が手下共に大木の頂上に戻せ
と命令した。手下共は皆しり込みして逃げ出したので仕方
なく秀は命がけで登って無事雛は巣に戻った。寺の住職がこ
の話を聞いて大変感激した。住職は秀の善行に報いて境内
の銀杏の実を自由に採るのを許した。これにより秀は銀杏
の落ちる時期にお庫裏さんから竹箒で追いまわされる騒ぎ
から解放された。町内の悪戯鬼の代表が秀なら評判の秀才
は床屋ムトーの次男勝夫さんだ。県内で一番の中学四年生
だ。我が家ではその勝さんとニュース映画を見に行くことは
公認だった。理由は勝さんが小学生の私に何でも判り易く
教えてくれるので勉強になった。例えば私の小学一年生の
時に日独伊の三国同盟が結ばれた。

遠い国と日本の同盟が何故結ばれたのか私は理解できな
かったが、両親も説明ができなかった。勝さんは日本の現在
の状態から判り易く説明をした。資源のない日本が中国に
資源を求めて進出したが世界には日本の侵略と映り遂にア
メリカから鉄石油等の物資を止められてしまう事になった。
これでは日本は世界の孤児になってしまうのでドイツとイタ
リアと手を結ぶことになった様だ。

「同盟と言うのは独伊のいずれかが何処かと戦争したら日
本も参加するの」と聞くと勝さんはこともなげに、

「慎ちゃん、当然だよ」と答えた。

「世界一強力な軍隊を持つドイツと手を結んだから何処の国と戦つても負けるわけではないよ」と付け加えた。

勝さんはドイツ国民の勤勉性を何時も誉めていた。それ故にドイツの軍事力は急成長を遂げたと言う。勝さんは将来軍人になると私に言った。中学を卒業したら陸軍士官学校を受験する様である。勝さんなら合格間違いなしだと誰もが思った。

悪戯鬼の秀は折角善行を施したのにその後も隣りの町内までも遠征して喧嘩に明け暮れている。ところで次に親孝行息子と言えばたーちゃんが町内一番の折り紙が付いている。

本名は田所忠なので皆がたーちゃんと呼んでいる。今高等科二年生だったが学力優秀運動神経は抜群で家が裕福であれば当然一中に進学できたと担任の先生が残念がった。田所家の大問題はその父親にあった。稼業は土木であったが仕事には身が入らずに酒と博打に明け暮れた。当然家には絶えず借金取りが押しかけていた。町内でも彼は鼻つまみ者で誰一人相手にする者はいなかった。それが自尊心を傷つけるのか、酔うと道端に寝転がって誰彼なしに悪態をついた。特に私の父が巡査なのが気に入らないのか、私の家の前で酔っては悪口雑言を浴びせて最後は潰れて道路に寝込んだ。そのたびにたーちゃんと叔母さんと私が家まで運んでは自称田

所組の親分を寝かしつけた。然し珍しく素面の時に出会うと、

「坊主、この前は随分と世話を掛けた様だなありがとう」と愛想を言ったりした。

たーちゃんのお母さんはその都度私に謝りながら、あの人の出は立派な士族の家系だが早くに母親を亡くしてから性格が変わり親戚中でも誰も相手にされなくなった可哀相なお人ですと庇った。一家の生活費はこの叔母さんとたーちゃんが稼いだ。叔母さんは紡績工場の女工として働いた。たーちゃんは学校から帰ると妹の夜食を用意して町内の竹の湯の風呂焚きに出かけた。竹の湯の主人はたーちゃんを我が子の様に可愛がっていた。そのたーちゃんに大転機が訪れた。学力は首席それに運動神経は抜群と文武に秀でたたーちゃんを校長が見逃すはずがなかった。校長は強く海軍予科練の受験を勧めた。一家の大黒柱を失う事を恐れた叔母さんが私の父のもとに相談に来たが父は立場上反対はできなかった。逆に志願を勧められて叔母さんは肩を落として帰って行つた。只一人竹の湯の主人だけが猛烈に反対した。たーちゃんに、

「今に戦争が始まるこの時にわざわざ死に行くようなものだぞ」と諫めた。

然し結局たーちゃんは合格して入隊することになった。そ

の前夜壮行会が行われた際に珍しく酒に弱いはずの父が深酒の拳句たーちゃんの親爺さんに絡んだ。

「おい、田所組の親分さんよ、これからの御時世だ。戦争にでもなつてたーちゃんが戦死して軍神にでもなつたら、お前さんも軍神のお父上だ、何時までも酔っ払いの厄介者を続ける訳にはいかねえだろぜ」ととんでもない調子で喧嘩を売った。弱った親爺さんは、

「おい、坊主早く巡查を連れて家に帰りな、お前の親爺は酒癖が悪すぎるぞ」と言った。

竹の湯の主人が心配していた通り戦争が始まった。私が小学二年生の昭和十六年の十二月八日にアメリカを相手の戦争になった。ラジオでニュースを聞いた大人達は誰もが大興奮していた。新聞が毎日戦況を伝えた。これに国中が勝った、勝ったと喜んだ。

町内から毎日の様に出征して行く若者が常さんのラップで軍隊に送られた。常さんは町内の在郷軍人の最古参である。十八才の時に日露戦争に従軍していた。

常さんは有名な第三軍乃木大将の師団でラップ手を勤めた。これが常さんの自慢であったが同年輩の人の中にはこの経歴を疑う人もいた。理由は第三軍乃木師団と言えば旅順攻撃は最大の激戦であつただけに常に戦場の最前線で兵士を鼓舞するラップ手はその死傷率が高かつた。それなのに

何の負傷もなく帰還した常はおかしいとその人は異を唱えたが町内の人々は誰も異議に肩を持つことはなかつた。そして常さんの経歴を信じた。

古い町内から差別を受けて劣等感に打ちひしがれていた人々にすれば日露戦争の英雄常さんが町内にいることが唯一の救いであつた様な気がする。確かに町内からの出征軍人の行列の先頭に日露戦争時代の軍服の常さんが進軍ラップを吹く様子は子供心にも他の町内では見られない光景だけに感激した。常さんは間違いなく第三軍乃木將軍が白馬に乗つて師団の兵士を閲兵する時厳かに栄誉礼のラップを吹いたに違いないと私は思った。

然しその英雄常さんがアメリカとの戦争が始まつて町内が湧きあがつているさなかに意外に冷静だった。むしろ表情は暗かつた。

「慎ちゃんよ、戦争というものは皆が思うほど勇ましいものでもないし、楽しいものでもないよ。今に若者がどんどん死ぬよ、大変に酷いものなのさ、それに今は勝つた勝つたと喜んでるけれど世界の大国はそれは広くどんなに勝ち進んでもきりが無いのさ、その結果がナポレオンみたいに深入りし過ぎて負けるのさ」と小声で囁いた。

私はなるほど町内で戦争を本当に知っているのは常さんだけだと気がついた。秀才の勝さんでもそこまでは気が付いて

いなかった。前年には日本より一足早くドイツがイギリス、フランスに宣戦を布告してヨーロッパ全体が第二次世界大戦に突入していた。そのドイツのニュース映画を一人で見に行った。ニュースはドイツがポーランドに怒涛の進軍をするのを捕らえていた。戦争は近代化していて大型戦車と高性能な航空戦を展開していた。

「慎ちゃん、日本は海に囲まれた国だ。それだけに侵略された時に戦場は海になる。その時に備えて戦艦武蔵と大和が建造されたのさ、これ等の戦艦は不沈艦で日本近海にアメリカ艦隊を引きよせて大海戦で勝利するのさ、日本海海戦と同じことだよ」とこともなげに私に言い聞かせた。しかし世界の動きは時代遅れの海戦ではなく空に戦いが変わっているのをまるで気が付いていなかった。やはり前年に結ばれていたドイツ、イタリア、日本の三国軍事同盟により何時かは第二次世界大戦に巻き込まれると予想されていたのがその通りになってしまった。

然し戦争の本当の恐怖を誰も知らなかった。我が家の直近の恐怖は大雨の時に家の周りに泥水が押し寄せる事であった。町として後発の広江町は古い町内と比較すると土地自体が低い処にあった。古い町の道はそのむかしから水害から守られた高い土手だった所が多く大雨から守られている様であった。その分低地の広江町は水害に弱かった。我が

家がある路地は一度大雨が降ると直ぐに水がたまった。それが何時までも引く事がなく滞留したので衛生上問題だった。悪臭が辺りを包んだ。行く人は皆鼻をしかめて僅かに顔を出した陸地を探して歩いた。

夏は蚊の発生が尋常ではなかった。伝染病発生を恐れた市役所から白衣を着た衛生部の人達が消毒用のタンクを担いでやって来た。あまり誇れる光景ではなかった。近くの町で日本脳炎や赤痢、ジフテリアなどの伝染病が発生するとあたかもこの辺りが感染源であるかの様に警戒したがこの露地の住人は病気に関しては全く無縁で呆れるほどに元気だった。子供達は風邪などで高熱が出てもミミズの煎じたものを飲まされて熱が下がった。それと露地奥に住んでいた山伏の祈禱も大活躍した。祈禱と同時に祭壇の水と山伏が病の時に飲む薬草丸を与えてあらゆる病を治した。

私も小学二年の時に百日咳にかかったがこれが大変な病でヒーヒーと笛の様な咳とまるで食欲がなく直ぐに入院となった時山伏が私が直してみせると言い出した。毎日薬草の煎じた汁を飲まされたが不思議に回復した。然し彼にも直せない病があった。肺病である。戦前の日本では国民病であった。厄介な事にこの病は前途ある若い人が中学生になった頃よく罹った。薬らしい薬もなく病人は栄養を摂って只空気の澄んだ山間地の隔離病舎で寝ているだけであった。母は

異常なほどの病に敏感だった。そして予防策としてとにかく胃腸を丈夫にして体を壊さないのが第一と言うのが持論であった。当然私には極力生物は食べさせなかった。裏の庭にできたイチジクや琵琶の実を食べたかったが許されなかった。確かに母が心配した様にイチジクの実に蠅がたかっているのを見ると母の心配も一理ある様な気がした。当時の家の中にはいたるところに蠅取り紙がぶら下がっていた。紙には糊がぬられていて蠅が止まると足が取られて捕えられた。この蠅取り紙を交換するのは子供の仕事であった。夏は蚊の発生も厄介で昼でも蚊取り線香を焚いていた。夜は蚊帳を吊って寝ていたが一匹でも蚊を蚊帳の中に持ち込むと大変だった。子供が刺されて騒ぎ出すと家族ぐるみで追い回した。

蚊帳は蚊を防ぐためだけでもなかった。雷が鳴り出すと大急ぎで蚊帳を取り出して子供達は逃げ込んだ。昔の迷信で雷は蚊帳を嫌うと信じられていた。怪談好きな母が必ず薄暗い蚊帳の中で私に怪談を聞かせた。今から思うとそのほとんどが小泉八雲の話であった。

戦争も初期の頃には空襲の恐れもなく灯火管制の必要もなかった。夜間は従来通り電気は煌々と輝いていたし夏などは夜店も賑わった。千手堂通りにはかなりの夜店が並んだ。

近郊の農家が野菜を並べていた。母は帰りに荷物が多くなることを見込んで私を連れて買い物に出かけた。ある日私と同じ組の友達が親の手伝いで野菜を売っていた。友達と最初に目が合った時にはお互いにバツが悪かったが友達が母親に同級生だと告げたらしく母親は私達に軽く会釈した。事情を知った母はすぐにこの店で品定めをさせた。買い物はかなりの値引きで母は大満足であった。私は友達にとっても悪いことをしてしまったのではないかと恐れた。私を見たとお陰であるの一家は商売で損をしたと思った。母はまるで無頓着で又あの店に行こうと言ったが私は聞こえないふりをして返事をしなかった。私は友達が教室で何時もちびた鉛筆を使っているのを見ていたので今度会った時新品の鉛筆を渡そうと思った。

夜店の並んだ千手堂通りから大正町に入った。道の両側の家がそれぞれに縁台を出して夕涼みをしていた。縁台に陣取る男達はパンツか褌以外身につけている物はなくちよつと見には裸に近かった。女達も年配の人ほど上半身をむき出しにしている。然し皆が同じ様に首の周りに汗取りの手拭をまいているのが可笑しかった。縁台の周りを湯上りのまま騒いでいる児を母親が追いかけるやら、スイカに夢中にかぶりついている小学生や、将棋盤を覗きこんでやたらに知ったかぶりの酔っ払いの老人など戦争などまるで感じられない

平和そのものの光景であった。蚊取りのもうもうたる煙の中に下町の住人達の猥雑さと逞しい生命力が混沌としていた。

少し静かな家並みに来た。そこに薬屋があった。この店の前を通る時何時も気になる看板があった。看板に描かれた顔は嘗てドイツの宰相だったビスマルクその人であったのでその横に宣伝された薬に興味があった。薬の名前は梅毒であった。母に聞いてみた。

「お母さん、梅毒はどんな病気なの」母は一瞬困った様な顔をしたが、怒った声で、

「子供らには関係ない病気だ。知らんでいい」と言ったきりプイと横を向いた。私はビスマルクが宣伝するには良く効く薬だろうと納得した。その時私達の横を白い夏服の巡査が腰のサーベルをガチャつかせて自転車を通り過ぎた。父はまるで私達に気が付かないふりをしていたが、何時も「公務中は町で俺を見かけてもむやみに声を掛けるな」と言っていたので間違ひなく知っていたに違ひないと思った。父が通り過ぎていく先では裸の男達が混乱していた。巡査が来るのを見て皆驚いて家の中に逃げ込んだ。軒先の夕涼みの男達の姿が消えていた。

当時の法律で裸は祭りの神輿以外は町中では禁じられていた。始末書を取られると罰金が科せられた。この様子を

父の跡を追いながら眺めている内に私は巡査が敬遠される理由が判った。厄介者が去った後には又元の景色に戻り何事もなかった様に笑い声を立てた。私と母は遠慮がちに道の端を人に会うのを恐れて家に急いだ。この頃の戦場は誰も知らない南の島であった。

真っ白な海軍の制服と腰に短剣を吊った青年が町内に帰省してきた。たーちゃんである。歌の歌詞にある七つポタンは夏の光の中で輝いて眩しかった。町内の英雄を悪戯鬼の秀とその取り巻きが先導して歩いてきた。子供達がたーちゃんに近づこうとすると秀が威圧して追い払った。誰もが町内から若い海鷲が誕生したのを喜んだ。そして誇りに思った。然しもう昔のたーちゃんではなくなった。

今までついぞ路地裏に足を運んだ事もない町内会長までも田所家に挨拶に来た。小学校の校長が明日全校生徒で歓迎会を開くので児童達に予科練の素晴らしさを話してほしいと言って帰って行つた。こうして大人達が勝手に決めていく予定表にたーちゃんは組み込まれていった。田所の叔母さんはこの様子に驚いて只おろおろして泣くばかりで何も手に付かなかった。心配した母が食事の用意をして私に手伝いをさせながら夕食を田所家に届けさせた。私がたーちゃんに、

「予科練の生活は楽しい」と聞くと、笑っただけで答えなかった。夜帰って来た父が最近軍属になって大手土木の飛行場建設に参加することになった。たーちゃんの親爺さんが出かける前に父に話した様子を伝えに田所家に行った。

「巡查よ、色々親身になって世話をしてくれて有難うよ。たー坊は海軍の飛行機乗りだ。俺は南の島で飛行場を作つてあいつの為にひと肌脱ぐぜ」親爺さんはこう言い残して出かけて行ったよ。父のこの一言にたーちゃんは涙を流して喜んだ。父が予科練の訓練は厳しいかと聞くと、

「叔父さん、地獄です」と答えた。父は、「今の言葉は誰にも言うな」と厳しい顔で咎めた。

翌日早朝から田所家の玄関前には日露戦役の軍装に身を固めた常さんがラッパを片手に待ち受けていた。学校までの行進のラッパ手を引き受ける心算の様だ。小学校の門まで来た時には勇ましい進軍ラッパに変わった。

校庭には全校生徒が整列をしてたーちゃんを迎えた。校長がモーニング姿で登壇してこの青年は当校の誉れある先輩であると紹介した。次に登壇した、たーちゃんは生徒達に親しみ易い笑顔で話しかけた。先ず予科練の一日を朝起きしてから夜寝るまでの生活を生き生きと話した。中でも特に厳しく守られている規則について、常に「行動五分前」の規則を判りやすい例をあげて話した。生徒達にも厳しい予

科練の一日がこの話で充分理解できた。

軍服を脱いだたーちゃんの身体は逞しく日焼けしていた。生徒に海軍体操を順に教えた。砂場に駆けて行つたと思つたら鉄棒にとびついて大車輪を何回でもして全員を驚かした。砂場の横に置かれた跳び箱の二十段を軽々と飛び越えた。生徒達はこの飾りけのない純真無垢な青年を好きになつたし、先生達は涙を流しながら拍手して彼を称えた。行事の最後には校庭に置かれたオルガンで「予科練の歌」が弾かれた。直ぐに生徒達の太合唱になった。校庭には日の丸の小旗が波の様に揺れた。最後に校長が「田所君の前途を祝して万歳を」と言い三唱の音頭をとった。その間たーちゃんは海軍式の爽やかな挙手の礼でこれに答えた。

最後にたーちゃんが静かに語りだした。「自分は軍人です。何時か皆さんにお別れをする時が来ます。ある日戦闘機が一機現れてこの校庭の上空で三度旋回して両翼を上下に揺らしながら去つて行つたら私がお別れに来たと思つて下さい。今日は一生忘れられない一日になりました。有難うございました」と挨拶した。これを聞いた子供達は只単純に喜んだが大人達はこの挨拶の意味する所が痛いほど判つただけに皆が目に涙をためた。

確かにこの時期国民には知らされていなかったが戦況は日本に不利な状況になっていた。この五月にはミッドウェイ海戦

で日本海軍は大事な空母をほとんど失うという大敗北を喫していた。恐らくたーちゃん達予科練生は自分達のこれからの運命を知らされていたと思う。

私が四年生になったある日先生が黒板に「玉砕」と大書した。そして「この字が読める者は」と尋ねた。組で一番漢字に長けている者が「ギョクサイ」と読んだ。先生は「それではこの字の意味するところは」と尋ねた。その生徒が「玉」となつて砕け散る事です」と答えると先生が「その通りだが、これからは特別の意味を持つ言葉になったので説明を加える」と言つて次の様な事実を生徒に話した。

教室の片隅にあつた地球儀を片手にアリューシャン列島のアツツ島を指で指しながらこの島の守備隊全員が戦死し、全滅したのでこの事態を「玉砕」と大本営が表現し発表された。そしてこの後同様な事が起きればこの表現が使われる事になると説明をした。国民が初めて日本の敗北を知つた強烈な瞬間であつた。ラジオでこのニュースは繰り返し流されたがそのたびに音楽は「海ゆかばの曲」であつた。「海ゆかば」の歌は戦時中の行事の締めくくりに必ず歌われた歌で第二の国歌と言われた。

「海ゆかば、みづく屍、山ゆかば、草むす屍、大君のへにこそ死なめかえり身はせじ」作曲家の信時潔が昭和十二年に作つた曲で歌詞は万葉歌人の大伴家持の作である。

大伴家は代々武を持つて天皇家に仕えて来た家柄で言い伝えを家持があらためて詠つた歌だと言われている。国が推奨しラジオや式典で必ず歌われた。特に「玉砕」放送で流されてから国民の心の奥深い処で戦争の哀しみの記録と共に沈殿し鎮魂歌として記憶された。

戦後は余りにも多くの若者を戦場に送り犠牲にした歌としてタブー視されて世に出る事はなくなった。この歌の持つ不思議な神秘性は当時小学生の私でさえこの歌を聞いたり歌つたりするたびに胸をかきむしられる様な厳肅な気持ちに打たれたものである。確かに静かで暗い歌なのに人々を激しく戦いに駆り立てる不思議な魔力を秘めた曲だと思う。

日本が緒戦で手に入れた南の島々が次々と「玉砕」していった。アメリカはそこに次々と飛行場を作り日本本土の空爆を可能にしていった。そこでにわかに防空壕を町内の各組に一個ずつ作る事になった。防空壕は防空班長の指揮のもとと工事を進める事になったが最初から露地の連中には期待していなかった。まず人手がない上に資材や道具など資金を寄付する金持ちがいらないし適当な土地が見当たらなかつた。結局班長は呆れて手を引いてしまった。見放された露地の連中は町内で唯一防空壕を持たない組になった。私は心配になつて父に問いかけたところ父が意外に冷たい返事をしたのに驚いた。

「アメリカが岐阜を空襲するとしたら木造の家ばかりや、焼夷弾で焼き払うだろう。火力はおそらく二千度ぐらいになるだろうからこの辺りの防空壕ではほとんど用をなさないだろう。逃げ込めば全員焼け死ぬぞ」と言った。

父が言う様に町内にできた防空壕は穴が掘られてその上にトタン板が置かれて土をかぶせた作りになっていた。そして必ず煙突の様な空気取りの筒が突きでていた。これではおそらく熱い外気や煙が逆に入り込んでくる感じであった。試しに戦場の経験者常さんに聞いてみた。確かに戦場の塹壕は深く掘られて爆風を避けるには効果はあるが、あの程度の防空壕では火力には効果はないと言った。「慎ちゃん、空襲になったらとにかく町から遠い処に逃げる事だね」と笑った。戦況は三年目に入り益々追いつめられてきた。兵器生産の基になる金属の不足から軍部は金物を強制的に供出させた。私達も回収の手助けに駆り出された。上級生から「野村、寺から順に一軒ごとに声を掛けてこい」と命じられて渋々出かけた。

最初に顔を出した大堂寺の「お庫裏」に突然怒鳴られた。「小僧、これ以上何を出せと言うのだ」

余りの剣幕に恐れをなして逃げ帰ったが、追いかけて来た寺男の話で「お庫裏」の怒りが判った。どうやら最近軍関係者と町内の防空班長が来て由緒ある釣鐘を無理やり

供出させられた様であった。寺男は四百年の歴史ある釣鐘も遂に潰される世の中だと嘆いた。

とほとほと二軒目の白い西洋館の家に向かった。初めてしっかりと表札を見た。「土岐」と書いてあった。女の子の母親が顔を出して、

「あら、貴方が来たの」と笑った。

町内からの連絡で小学生の社会奉仕で金属回収が近日中にあることは知っていた様だ。病人の女の子が庭に出て、「此処に用意したので見てくれる」と言った。

麻の袋から出て来た物は何れも競技大会で表彰されたカップとかトロフィーと運動具だった。運動具は子供が初めて見る物ばかりで珍しかった。今から思えばゴルフのアイアンとか冬山登山用具のアイゼンなどもあった。どうやらこの家の主人は運動が趣味の人だと知った。それに子供心にも一般家庭とは違う生活をしている家だと思った。帰り際に母親が私に声を掛けた。

「今月の二十五日にトミ子の誕生会をやるので良かったらいらっしやい」と言ってから、

「そう言えばまだ僕ちゃんのお名前も聞いていなかったわね」と笑った。

私は名前と住所を告げて、

「母と相談してからご返事します」と答えた。

帰宅後母に事情を話したら、

「慎も四年生やったなあ、そろそろ他所の家に招かれたらきちんとした挨拶ができな恥ずかしいなあ」と言って許してくれた。

そして母が言うには当日には何か誕生日のお祝いを持っていくべきだと言ひ、母が用意をする事になった。そして品物は赤い毛糸の手袋に白い小兎を飾りに編み込んだ思ひの外立派なお祝いになった。

当日の客は彼女の従兄弟とか学友達で初対面の私は話の輪には加われなくて、自然に母親の相手をする事になった。そして話題は私の家庭の話しを中心になった。父の職業を聞かれた時に「巡查です」と簡単に答えれば良かったものを、何故か「警察署」と言ってしまった。母親はこれを又勘違いして、

「あら、お父さんは署長さんのね」と言った。それを否定すれば問題ないのに私は曖昧に頷いてしまった。明らかに嘘を言ったのですっかり狼狽した。そこへ思ひもよらない質問が飛んできた。

「慎太郎さんと支那そば屋さんはもしかして御親戚なの、何時かの夕方屋台を手伝って見えましたわねえ」と尋ねられて、

「親戚ではありません。頼まれて押しただけです」と咄嗟

に答えた。何故か母の実家が支那そば屋という事実が恥ずかしい事の様に思えて思わず否定してしまった。

帰宅途中私は自分に対して嫌悪感と取り返しのない後悔でひどく落ち込んでしまった。トボトボと町内に向かつて歩いていた。前方から常さんが来たのにも気が付かなかった。常さんは私の様子を見てこれは何かあると察知した様であった。

「慎ちゃん一体どうした。心配ごとなら俺に話してみろや」私は正直に落ち込んだ事情をすべて話した。

「それは慎ちゃんが大人になった証拠やね、男の見栄やね。彼女の家に自分を良く見せたい、ましてや見下されたくないと思ひ自然に嘘を言う事になる。誰にでもある失敗だよ。そんなに落ち込むなよ」と言うので、

「常さんも経験があるの」と聞くと、常さんが俄に自分の経歴を語りだした。彼は日露の戦いで有名な乃木三軍のラッパ手として旅順攻撃に参加した経歴を皆が知っていた。だがその経歴は事実ではないと常さんが私に打ち明けた。

常さんが所属した軍団は第二軍奥將軍の配下であった。第二軍の構成は東京第一師団と名古屋第三師団、大阪第四師団で構成された。常さんは名古屋第三師団のラッパ手として入団した。この第三師団と第二軍が混同して常さんの経歴が間違つたまま独り歩きした。

常さんにしても戦歴を聞かれるたびにいちいち第二軍の激戦を説明するより乃木三軍の旅順攻撃に参加したと思われる方が話しやすかったに違いない。然し常さんの第二軍は開戦当時より激戦に激戦を繰り返した立派な軍団で旅順攻撃の足がかりとなつた重要拠点金州山を攻略した最強軍団であつた。だがこの金州山の激戦で乃木將軍の長男勝典は戦死した。のちに乃木將軍は此処を訪れてあの有名な漢詩を詠んだ「山川草木転荒涼、十里風生臭く」、常さんは私を慰めたあと、

「然し男なら何時か本当のことを話して許してもらう勇氣は要るわね」と自分自身に言い聞かせる様に言った。私は常さんに話して良かったと思つた。

露地の家並の家主は母方の親戚で我が家では本巢の叔母様と言われていた。大柄で肥満な女性だつた。月末に決まつて家賃の集金に來た。家賃は前もつて母が集めておいた。

使用人の引く人力車に揺られてきた。來ると直ぐに露地前にある三島の分家が商っている商品の大小さまざまな瓶壺がおかれたこだかい丘があつた。そこへ遠慮なく立ちションをした。ある時例により勢い良く放尿をしていたところを意地悪な番頭に見つかった。番頭は商品に傷が付いたと言いがかりをつけて法外な弁償金を要求した。叔母様はこれを

逆手に安値に値切り番頭が驚くほどの数の瓶を買い取つた。瓶は小作人の田畑の肥料瓶になつた。それ以来瓶置場の陰が叔母様公認の立ちション場所になつた。時々人力車を返して我が家に泊まつた。翌日県庁に行く為である。叔母様の肩書は実科女学校の理事長で、母はこの学校の裁縫科の出であつた。叔母様は、「政子の裁縫の腕前はうちの卒業生の中で一番や」と誉めた。然し私には苦手な叔母様で來る度に「僕、級長になつたか」と聞いた。実は私は一年から副級長にはなつたが級長には一度もなれなかつた。叔母様はままだと聞くと決まつて「大器晩成」と私を慰めた。

父が歸るのを待ちかねた様に二人で仲良く晩酌をした。まだ世間に知られていない情報を知つていた。連合艦隊司令長官山本五十六の戦死も何処で聞いてきたのか知つていた。「何となく噂に出ていたので氣になつていたが矢張り事実でしたか」父は力なく呟いた。

この年昭和十八年は戦況がどんどん下り坂に向かつていった。ガダルカナル島が奪取された。秋には学徒出陣が始まり親戚の若者も繰り上げ卒業で海軍に入った。学校では毎月一日は神社へ戦勝祈願に出かけた。級長が指揮棒を持つて先頭に立つた。私も一度はこの指揮棒を捧げ持ち隊列の先頭に立ちたいものであるがその機会はなかつた。然し級長が欠席してその機会が來た。

先生から指揮棒が渡されて学校帰り振り回しながら町内に来たところで、常さんに捕まった。目ざとい常さんは私の持つ指揮棒を見て事情をすでに察知していた。

「慎ちゃん、いよいよ指揮官になったなあ、お祝いに行進の先頭でラッパを吹くか」と言ったが、無視して通り過ぎた。後ろで「冗談、冗談」と言う声が聞こえた。

翌日校庭で整列しいざ出発という時に校門の前にラッパを首にした軍装の常さんを見てドキンと心臓が音を立てた。何時の間に親しくなったのか校長先生と何やら挨拶をかわしながら行進の後尾に従った。神社に着いていよいよ拝礼の時になったら常さんが先頭の校長の脇に並んだ。そして厳かに奉呈のラッパを吹いた。これが終わると何時ものように校長が拝礼の先導をした。何時もなく厳肅な雰囲気の中での戦勝祈願となった。校長先生も大満足で常さんにお礼を言っていた。常さんは私と目が合うと「どうだ」と言わんばかり片目をつぶって見せた。学校の帰り道最近たーちゃんが九州の最南端の基地に移動したと叔母さんから聞いた。夜父に伝えると、

「それは特攻基地の事だなあ」と呟いたのが気になった。年が変わり昭和十九年になった。戦況と同じ様に世間の雰囲気もとげとげしてきた。朝登校の集合場所で秀と顔を合わせた。鼻水を垂らしながら飛んできた。

「慎、お前が親しい西洋館の親爺がスパイ容疑で憲兵隊に逮捕されたぞ」ととんでもないことを言った。朝早く馬に乗った憲兵と警察がたくさん来て家の中をひっかきまわしていたそうだと付け加えた。父に秀の情報が正しいか聞いてみた。やはりスパイ容疑の逮捕は事実であった。何が原因だと聞くと、

「そんな事お前が知ってどうするんだ」と、逆に糾された挙句、

「そういえば、お前あの家族と親しいそうだがもう出這入りしない方が身のためだぞ」

釘を刺されてしまった。病気のトミ子さんの事を思うと、胸がしめつけられるような気がした。一度見舞ってやりたいと思ったがこれは母に相談してからの事であると考えた。

私は少し大人になった様だ。母は私の申し出を厳しい顔で聞いた後で、

「病人の見舞いなら栄養のつくスープがいい、それを持ってお行き」と言った。

翌日学校から帰宅後母が用意してくれた熱湯のスープを抱えて土岐家に向かった。玄関で私を迎えた母親は驚いた様子を見せた。トミ子さんは意外に元気で明るかった。

居間で出された紅茶を飲みながらトミ子さんから事件のあらましを聞いた。最初母親は子供の私に話したくない様

だったがそれでも所々説明を加えた。

土岐家は戦前アメリカにいた。主人はボーイング社の設計士で、戦争が始まる前に日本に一家は帰国した。待っていた様に国は主人を大手航空機工場の軍属として徴用した。そして戦闘機の設計に携わってきた。然し遂に資源不足から戦争末期になって、戦闘機の製造ができなくなり、代わりに特攻用のボートの設計を強制される様になった。材料はベニヤ板、示されたボートのスピードは極限を超えていた。トミ子さんの父は強い正義感の持ち主であった様でこの人間魚雷に初めから反対であった。ある日遂に上司と衝突して辞表を出した。元もと帰国時から要注意人物として軍の監視下にあつたのですぐに戦争非協力者の烙印を押されて逮捕になった。話し終えたトミ子さんはその様な父を誇りに思う様であった。噂に聞いていたこの土岐家は金華山に齋藤道三がいた時代の美濃国守護土岐家の末裔という話もまんざら嘘ではないと私は思った。何となくこの家は普通の家庭とは違う気風が最初から感じられた。

世間はすべてが配給生活で益々食料事情が悪化してきて他人の事にかまっていられなくなり土岐家のスパイ騒動の事などまるで無関心であった。私が時々トミ子さんを見舞っても誰も咎めだてする人はいなかった。

戦時下にあつても昔からの風習というものは守られていた。例えばあの当時は二十日という日を大層恐れた。暦の立春から数えて二十十日の九月一日あたりに大風が吹くのを農家は稲作に与える影響でとくに気にした。母の祖父はこの日になると田んぼの端に長い竹竿を立てた。その竹竿の先には大鎌がくくりつけてあつた。不思議に思い聞いてみた。

「お爺ちゃん、何の呪いや、これは」

「見たとおり大鎌で風を切り裂くや、これで嵐から稲が守られる」爺さんは澄まして答えた。

農家が信じた行事を農家でもない常さんがいつも守っていた。今年も家の前に立てた。

「常さん、農家でもないのに何のためや」

ある年遂に聞いてみた。

「慎ちゃん、この古い家が毎年嵐から守られてきたのはこの呪いからやで」と言った。

話のついでに常さんに教科書に出てくる神風について尋ねた。

「最近玉砕ばかりや。どうして神風が吹いて日本を守らんのや」

「慎ちゃんは神話の基になった元のフビライ軍が大船で日本を襲った文永と弘安の役の二回の戦いの事を言ってるのやね。」

あれは何れも嵐に襲われて船が沈み戦わずして負けた」

「元は二回も同じ過ちを何故犯したの」と言う私の疑問に
対して常さんは、

「帆船は風が吹かなきや日本に来れない、二回とも同じ頃の
季節風に乗って日本を襲ったのだが同じ様に嵐に見舞われた
訳だ」

常さんは理論整然と説明したが、だからと言って「神風」
を否定したわけではなかった。

「慎ちゃん、念のために言っとくが入試で試験官に神風につい
て質問されたら、季節風なんて答えたら落ちるぞ。あくま
で軍国少年らしく神国ですから必ず吹きますと答えるのだ
ぞ」と念を押した。

昭和十九年も後半になる頃には近所の中学生は工場に勤
労働員されて工具になった。近所の高等女学生は縫製工場
で風船爆弾ののりつけに動員された。小学生の私達さえ空
襲時町を守るために強制移転させられた建物の取り壊しの
瓦運びを手伝った。国民全員が動員されて、大人達は何か
言うとすぐ本土決戦が口癖で「一億総力戦」と言った。

隣組の班長が竹槍を抱えて遣って来た。明日は婦人会の
竹槍訓練がある様だ。母に竹槍を渡しながら明日町の広場
で訓練をやるよと伝えていた。私が母に聞いた。

「誰に竹槍を向けて攻撃するのや」

「阿呆、アメリカ兵に決まるとるがな」と、いやいや答えた。
私は日本が不思議な国になったなあと思った。「完全に戦国
時代に逆戻りや」と父に言うと、父は無視した。

暮れになりトミ子さんが一度家に来るようにと連絡して
きた。母の実家に頼んで卵を見舞いに出かけた。何と童話
でしか知らなかったクリスマスの飾りがもみの木にとり付け
てあった。お客さんのほとんどはどうやら土岐家を陰なが
ら助けている人達の集まりの様だった。トミ子さんはほとん
ど歩けなくなって、ベッドに寝ていた。私が挨拶に近づくと
「慎太郎さん、本当なら来年には高等女学校に行けたのに
残念だわ。それでこの辞典を使つて」とずしりと重い大辞
典を呉れた。

私は帰る前トミ子さんの母親に、
「前から謝るつもりでしたが、父は平巡査で署長ではありま
せんし、支那そば屋は母の実家です。嘘を言ったことを許
して下さい」と告げた。母親は何だと思えばそんな事、何
とも思っていないよと笑った。

「丸高さんから慎太郎さんのお家の事は聞いていましたから
心配しないで、それにトミ子は丸高さんのスープで助かって
きましたのよ」

私は苦手な丸高の叔父が土岐家に随分と感謝されているこ

とを聞いて驚いた。これは母にも伝えておくべきだと思った。

土岐家を帰る時庭に出て竹藪に人影がいた様な気がした、相変わらずまだ監視されてるようであった。慌てて道を町内の方に急いだ。

嘘を謝った事で気持ちがあすかり軽くなった。只トミ子さんの病状を考えると気持ちが落ち込んだ。然し今日の集まりはどうやら信者達の集まりだったようだがトミ子さんは私に神に召される日のことを明るく話した。それはむしろ楽しげであった。あの強さは何処から来るのか不思議だった。もう一度元来た道を振り返ると坂道を丸高の屋台が今夜も提灯をゆるゆると揺らしながら登って来るのが見えた。今夜もスープを届ける様だった。

「山賊みたいな頭を散髪に行つて来たら」と言う母の言葉で、床屋ムトーに行った。「慎ちゃん、久し振りにみたら随分と大きくなったね」と叔母さんが笑った。

「勝さんは元気ですか」と聞いたら、隣りのお客が横から口を挟んだ。

「坊主、勝さんはこの春士官学校を卒業して少尉になったぞ。勝さんは親孝行息子だ。この家の誉れだ」と誉めた。

この言葉にムトーの親爺さんが喜ぶかと思つたのに意外に冷たい態度だった。

「お客さん、せつかく勝を誉めて頂いたがこの家の親孝行息子はこの家を継いだ長男です」

この言葉に喜ぶと思つたお客が黙ってしまった、店の空気が一瞬にして凍つた。不機嫌になったお客に叔母さんがおろおろして謝っていた。親爺さんが私に話しかけて来た。

「慎ちゃん、最近近所で召集の赤紙が来た家があるかい」と聞いたので、

「隣の兄ちゃんに來たけれど一日で帰つて來たので親が恥づかしいと言つていたよ」

私の答えに客の一人が、

「最近町内の出征軍人の見送りが少なくなったのは竹屋の自慢息子が盛大な見送りで出征したのにその日の内に帰されたのが原因でひっそりと入營する人が増えた」と言った。

散髪を済まして帰る時叔母さんが、

「慎ちゃん、お父さんは巡査だから赤紙は來ないから安心だね」と言った。

この話を夜父に確認してみた。

「今日ムトーに行つたら叔母さんが巡査は赤紙が來ないから安心だねと言つていたが本当なの」と聞くと、

「世間はいいい加減なことを言うなあ」と嘆いた。そして実は署内では次々召召して今度俺の番だと噂されていると私に告げた。本当にそれから直ぐに父も出征することになつ

た。前夜食事の時に私に、

「俺みたいな年寄りにも赤紙が来るようではこの戦争は日本の負けだなあ」とこぼした。

憲兵が知つたら逮捕される様な危ない事を言った。それでも出征の朝は軍人になった。例の常さんのラッパも何時もより音高で盛大な見送りになった。これでもしもその日に帰されたら私は学校に恥ずかしくて行けなくなるのではないかと心中恐れた。

父は戻ることはなかった。これで竹の湯にも出征軍人の子として大威張りでいけるので母に言われる前に出かけた。

風呂屋は子供達の社交場であり情報交換の大事な場所だった。家族に軍人のいる家の子供は何かと威張っていた。その分父が出征してないときの私は肩身の狭い思いをしていた。今夜は誰にも遠慮はいらなかった。

番台の叔母さんが、

「慎ちゃんお父さんが出征したらなんか大人になったねえ、お母さん大事にね」

と声を掛けてくれた。番台近くの椅子で手下とラムネを大事そうに飲んでいた悪戯鬼の秀が私を見つけるとすつ飛んできた。

「西洋館の女の子が死んだぞ」と大声で私に言ったので、近くにいた大人達も驚いて一斉に私達を見た。私は小声で、

「どうしてわかった」と聞くと、秀も今度は小声で、近くにいた手下を指差してこいつが四日程前の真夜中に西洋館の屋根に人魂が飛んで消えたのを見たのだ。それから黒服の人達の出入りがあったので間違いないと断言した。まだ先月のトミ子さんのことを思い出して涙が出てきたが湯船の湯気でごまかした。あくる日学校帰りに土岐家に寄ってみた。玄関で呼び鈴を鳴らすと見知らぬ女性が留守番のものだと行って出てきた。名乗ると預かり物だと言って本と手紙を差し出した。やはりトミ子さんの死は事実だった。

本は生前私に読ませたいと彼女が考えていた本であった。手紙は母親が書いたもので今までの付き合いに感謝していた。葬儀は岐阜市内の古いカソリックの教会で行われた様である。やはり私が想像していた通りトミ子さんはクリスチャンだった。母親は自分の実家がある信州諏訪に引き揚げた様であった。最後に丸高の叔父にも感謝を伝えてほしいと結んであった。

その晩は気持ちが悪く落ち込んで夕食も進まず、すぐに寝た。母は私の様子を何も言わずに黙って見ていた。夢で見たトミ子さんは元気にローラースケートをしていた。金属回収の時に私に遊び方を説明していた時自分が元気な時の姿を見せたかったと涙ぐんだ事があった。夢の中で何を話したかは判らなかつたが、目が覚めて思わず悲しみが湧きあがって来

た。大声で泣いた。

朝早くに町内が騒然とした。馬の嘶きと蹄の音で目が覚めた。やはり憲兵が馬上から警官に指図していた。指差した家は「古紙屋」だった。家宅捜索が行われて古紙屋の人のいい働きの親爺さんが腰縄で警察に連れられて行った。近所の誰かが「スパイ」と言ったがとても信じられなかった。二、三日して真相が判った。当時アメリカはビラを飛行機から盛んに投下していた。勿論日本国民に反戦気分を起こさせる為であったが、中には空襲予告もあった。警察はこれ等ビラを見つけたら直ぐに届けることを義務付けていた。ましてやビラを所持したり人に見せたりするのを禁じていたが、古紙として回収した中にこのビラが紛れ込んでいた。それを長男が学校で自慢げに友達に見せたのが直ぐに警察に通告される事になった。ビラには岐阜の空襲も名古屋に次いで記載されていた。大人達はこれ以降岐阜空襲について毎日話題にした。然し何時来るかは誰にも判らなかつた。

然し空襲の前に暮れの十二月初めに大地震が来た。昼授業中だったが生徒は波打つ廊下を転げながら運動場に逃げた。私は逃げ遅れて目の前に担任の女性教師が大きなお腹をして転げていたのを力持ちの友の助けも借りて先生を無事屋外に連れ出した。とんで来た教頭先生が我々を大層

誉めてくれた。この年の通信簿に善行賞が記載されて級長に初めて任命された。母はお父さんに手紙を書けといった。地震は新聞に載ることもなかったが戦後になりこの地震は津波を起こし大変な被害を東海地方に与えたことを知った。暮れから翌年昭和二十年初頭には親しい人の戦死の公報が相決いだ。勝さんがビルマ戦線で戦死、ムトーの親爺さんは周囲の人達に勝は中国にいると思っていたのにビルマで戦っていたとはと話していた。常さんが何処で聞いたのかインパール作戦でおそらく密林での戦いだと言った。

四月に入りいよいよ沖繩戦が始まった。海軍の特攻作戦ですべての戦艦機が動員された。戦艦もすべて投入されてあの戦艦大和も片道の燃料で沖繩を目指した。九州南端にいたたーちゃんも出撃したと思われる。この後戦死の公報が来た。二階級特進も伝達されて上級飛曹になったところを見ると間違いなく特攻として敵艦に突撃したと思われる。葬儀は神事で行われた。南方に飛行場を作りに行った親爺さんの消息は判らないままであった。叔母さんは独り淋しく田所の実家へ身を寄せることになった。我が家ではたーちゃんの話は禁句になった。話題にすると直ぐに母が泣きだした。親しい人の死が連続して起きた。親戚の学徒出陣で早稲田から海軍に入隊した若者も激戦の沖繩で戦死した。

常さんの姿が久しく見ないと思つたら突然悲報が知らさ

れた。誰に看取られる事もなく病死していた。もとは風邪をこじらせていた。もともと肺を痛めていた。何時もは二三日すれば首に真綿をまいてかすれ声で姿を見せたものが今度は違っていた。然し自分でも最後は判っていたと見えて寢床で正装の軍服姿に首にはラツパを掛けて横たわっていた。葬儀の最後に在郷軍人会の人が消燈ラツパを吹いて最後の別れを告げた。音色はもの悲しく全員が目赤くした。

梅雨が続き町内には何とも言えない戦争に対して嫌悪感が広がっていた。できそこないの防空壕には水が流れ込み野菜の貯蔵庫の役目も果たさなくなった。そして七月九日の深夜から十日の早朝にかけて岐阜大空襲となった。最初は岐阜駅に大音響とともに大きな火柱が立った。私と母は忠節方面に避難した。長良川の堤防を目指したが途中の田んぼの畦に身を伏せて一晩じゅう焼夷弾の落ちてくる音を聞き分けていた。

焼夷弾の音は二種類あった。一つはざーざーと言う騒がしい音を立てて頭の上を流れて行った。危険な音は金属的なキーンという空気を切り裂く様な音は間違いなく近くに落ちた。長い夜が終わり朝になった。

堤防から南の市街地を見た。すべて焼けおちていた。トボトボと母と自宅のあった方角に歩いた。途中焼死体が人

形のように横たわっていた。何の感情も起きなかったが、溝の底に母親が幼子を抱きかかえた死体を見てしまった。幼子の足には赤い鼻緒の草履が履かされていた。親子は煙にまかれたと見えてまるで眠っている様であった。感情が戻った私は思わず大声で泣けてしまった。

各町内で焼死した人の大半は防空壕に逃げ込んだ人達であった。自宅跡地はまるで判らなかつた。三島町も大正町も広江町もすべて消えていた。私には何の感慨もなかつた。頼る先は父の実家武儀郡（現在加茂）白川町坂の東村へ向かつた。汽車は明日からしか動かないという事で残骸の駅で一晩明かした。

空腹は駅前の水道が破損して吹きだしていたのを飲んで腹を満たした。高山線は山奥に避難する人で混雑した。空襲の成果を偵察に来たのか今度は艦載機が低空でやって来た。飛行士が肉眼で見える距離まで迫った。時々気まぐれに機銃を発射した。駅が狙われたので通学の学生に被害者が出た。汽車は艦載機が接近するとトンネルに逃げ込んだ。

避難した田舎も食糧難は同じであった。毎日ひもじい日を送った。広島と長崎に新型爆弾が投下されたらラジオで聞いた。どの様な爆弾かは説明はなかつたが、被害が甚大だと聞いていよいよアメリカ軍の本土上陸作戦が始まったかと

思った。そして八月十五日が来て終戦となった。こうして私の小学六年生の夏は夏休みの前に空襲で家を焼かれ夏休みの真ん中で日本が戦争に負けた。そして新学期が始まると世の中は激変した。私は戦争を知る最後の年代になった。父が復員して警官に復職したので暮れには岐阜に戻ったが与えられた官舎は長良北町のはずれにあった。戦後の生活はこの地で始まったのでこれ以来広江町を訪れることもなくなった。勿論三島、大正町にも足を運んだ事もなかった。

最近久し振りに母の夢を見た。私は大学生で夏休みに帰省した様だった。東京から岐阜に到着した汽車を下りて駅から広江町に向かう様で矢張り藪の小道を自宅の方に向かう。トミ子さんの西洋館が見えてきた。庭の門は蔓バラで花が咲いていた。人の気配はなかった。正面に記念碑が出てきたが秀がいるはずはなかった。床屋ムトーを覗いてみたが店も奥の座敷も電気は煌々と輝いて座敷に盆提灯も灯っているのに人はいなかった。

只、八百源の店先には親爺さんが座っていた。父のお供えの西瓜を買う事にした。

「西瓜を一つ下さいな」と言うと、
「野村の息子さん夏休みですか、これが実っていて美味しいと思いますよ」と指先でトントンと大玉の一つを叩いて見せた。網に入れた西瓜をぶら下げて自宅の角まで来て、い

る筈もない常さんはどうしているのか気になって覗いてみた。壁に明治天皇の写真があつてその下に日露戦役の軍服とラッパが掛けてあるだけで誰もいない。自宅について、「只今」と声を掛けて入ると昔のままの白いエプロン姿の母がいた。「お供えの西瓜を八百源で買って来た」と言うと、母は相変わらずの厳しきで、

「ちゃんと吟味したかい、最近の八百源は質が落ちたからねえ」と言った。

「慎ちゃん、裏の井戸で冷やして於いてよ」

ガラスの皿に一切れを乗せて父の遺影に供えた。戦前の巡査の白い官服の父は若かった。

「本当だね、美味しいよ」と母が誉めたのでほっとした。

「慎ちゃん、今日もあの藪の小道を来たのかい、あの道を来るのはおやめよ、今に此処から抜け出られなくなるよ」と言つて母は消えた。夢から覚めて嫌な寝汗をかいていた。気分が悪かった。それと母の不気味な言葉が気になった。散歩に出たついでに足を延ばして何時か俳句の本を買った古本屋を探したが、本屋はすでになく確かに店があった辺りは駐車場になつていた。帰つてから例の古地図を探したが何処に紛れ込んだのか、いくら探しても出てこなかった。やはり私の思い出にある異界への夢の入り口、細い藪の小道まで記入された戦前の貴重な地図まで忽然と消えてしまい、今や

私は夢の異界の入り口を完全に見失ってしまった。夢で母が言った警告はこの事だったのか、これ以来残念ながら私は異界の夢は見たことがない。然し誰に何と言われても懐かしいなあ「異界の人々」よ。

優秀賞

川を編む町

山形県 川端 蒼一郎

長良川を渡る夜風が、幼い頃の記憶を運んでくる。稲葉紗月は東海道新幹線の車窓から、夜の岐阜の町並みを眺めていた。五年ぶりの帰郷だった。スマートフォンの画面には、母からの着信履歴が十数件並んでいる。最後のメッセージは簡潔だった。「お母さん、入院。すぐ帰って」

東京での編集者としての日々が、急に遠い世界のことのように思えた。満員電車、締切に追われる深夜、コンビニ弁当で済ませる食事。二十八歳になるまで、それが当たり前前の生活だと思っていた。しかし今、その日々がいかに機械的で無機質だったかを痛感する。

岐阜駅から長良川鉄道に乗り換え、故郷の水岐町へ向かう。車窓に映る川面は黒く、時折街灯が金色の波紋を描いている。電車は観光客らしい乗客もちらほら見えるが、地元の高齢者が大部分を占めていた。「あの篝火、まだやって

るのかな」呟いてから、自分でも驚いた。幼い頃、祖父に手を引かれて見に行った鵜飼の篝火。川面を照らすオレンジ色の光と、鵜匠の掛け声。あの時の興奮を、確かに覚えている。祖父の大きな手の温もり、川風の涼しさ、そして鵜が魚を咥えた瞬間の歓声。

水岐町駅に降り立つと、予想以上に人の気配が薄かった。昔はもつと賑やかだったはずなのに。駅舎も古びて、駅前のロータリーには数台のタクシーが待機しているだけ。駅前商店街のシャッターは半分以上が閉まり、街灯も間引かれて薄暗い。実家までは徒歩十五分。商店街を抜け、住宅街の細い道を歩く。記憶の中の風景と現実が微妙にずれている。あの文房具店は跡形もなく、よく買い物に行った肉屋も更地になっている。角の駄菓子屋も、今はコインランドリーに変わっていた。でも匂いは変わらない。川の匂い、山の匂い、

そして鵜飼煙の残り香。深く息を吸うと、胸の奥で何かが動いた。懐かしさと、同時に切なさ。時の流れの残酷さを、肌で感じる。実家の前で足を止める。母屋の電気は消えているが、離れの祖父の部屋だけが灯っている。八十九歳になる祖父・辰平は、今も一人で生活している。玄関の鍵は昔と同じ場所に隠してあった。そつと中に入ると、懐かしい畳の匂いが鼻をくすぐる。

「おかえり」振り返ると、祖父が廊下に立っていた。腰は曲がっているが、背筋はしゃんとしている。鵜匠としての矜持が、その姿勢に表れていた。紗月は思わず涙ぐんだ。五年間、会いたくても会えずにいた家族。東京での生活に追われて、つい疎遠になってしまった故郷。

「おじいちゃん、お母さんは？」

「病院に泊まつとる。お前も疲れとるじゃろう。明日の朝、一緒に行こう」

祖父の声は、記憶の中よりもずっと小さくなっていた。紗月は子供の頃に使っていた部屋で眠ることにした。窓を開けると川の音が聞こえる。長良川の流れは昔と変わらず、ゆつくりと海へ向かっていた。夢の中で、篝火の光が川面に踊っていた。

朝の光で目を覚ました時、紗月は一瞬どこにいるのかわからなかった。天井の木目、障子に映る山の影。ああ、帰っ

て来たのだと思った。台所から味噌汁の匂いが漂ってくる。祖父が朝食を用意してくれているらしい。洗面所で顔を洗いながら、鏡に映る自分を見つめた。東京での疲れが顔に刻まれている。頬はこけ、目の下にはクマができています。

「おはよう、おじいちゃん」

食卓に着くと、祖父が丁寧に朝食を並べていた。ご飯、味噌汁、焼き魚、漬物。昔と変わらない朝食だった。しかし、祖父の手つきはゆつくりで、時々箸を落としそうになる。年齢を感じさせる光景に、紗月は胸が締め付けられた。

「お母さんの病気、どのくらい前から？」

「三か月ほど前からかな。最初は風邪だと思っとった」祖父は箸を動かしながら、ぽつぽつと話した。母の美恵は五十八歳。一人で美容院を営んでいたが、体調を崩してから休業している。常連客も心配して様子を見に来てくれるが、いつ再開できるかわからない状態だった。

「検査の結果は？」

「まだはつきりせん。でも、入院が長引きそうじゃ」祖父の声に不安が混じっていた。いつも強がっていた祖父が、こんなに弱々しく見えるのは初めてだった。一人で母の看病をしながら、自分の体調管理もしなければならぬ。その負担の重さを思うと、紗月は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

朝食後、二人で病院に向かった。水岐町には小さな診療

所しかないため、隣の市の総合病院に入院している。車で三十分ほどの距離だが、公共交通機関では一時間以上かかる。祖父は運転免許を返納したため、タクシーを呼んだ。「この町も随分変わったなあ」タクシーの窓から町並みを眺めながら、紗月は呟いた。

「人がおらんようになった」運転手が答えた。中年の男性で、この土地で長く働いているらしい。「十年前と比べて、三分の二くらいかな。若い人はみんな名古屋や岐阜に出て行く」商店街の空き店舗、使われなくなった田んぼ、廃墟と化した工場。人口減少の現実が、風景の隅々に刻まれていた。シャッターが下りた店の前には雑草が生え、かつて賑わった商店街は見る影もない。

「でも最近では観光に力入れとるで」運転手が続けた。「鵜飼見物とか、古い町並み散策とか。外国人の観光客も増えた」

確かに、駅前には観光案内所ができていた。カラフルな看板に多言語表示。昔の水岐町からは想像できない光景だった。観光バスも時々見かける。町の生き残り策として、観光に活路を見出そうとしているのだろう。

病院に着くと、母は思っていたより元気そうに見えた。少し痩せたが、笑顔で迎えてくれる。

「紗月、仕事大丈夫だった？」

「大丈夫。しばらく休ませてもらった」

嘘だった。実際は、無理を言って一週間の休暇をもらっただけ。編集部は人手不足で、長期間席を空けるのは難しい。しかし母を心配させたくなくて、つい口から出た言葉だった。「お医者さんは何て？」

「もう少し検査が必要だつて。でも、悪いものじゃないと思うつて言ってくれた」

母の声は明るかったが、目の奥に不安が見えた。本当は、もっと深刻な状況なのかもしれない。それでも家族を心配させまいとする母の強さに、紗月は涙が出そうになった。

病室で三時間ほど過ごした後、祖父と二人で帰路についた。タクシーの中で、祖父が突然口を開いた。

「紗月、お前、こっちに帰って来る気はないか？」

「え？」

「お母さんも心配じゃし、わしも歳じゃ。そろそろ誰かに頼りたい」

祖父がこんなことを言うのは初めてだった。いつも「自分のことは自分でやる」と言って、頑固に独立を保っていたのに。老いの現実を、ついに受け入れざるを得なくなったのだろう。「考えてみる」

それ以上は言えなかった。東京での生活、仕事、そして薄い人間関係。全てを捨てて故郷に戻る覚悟が、まだでき

ていなかった。編集者としてのキャリアも、ようやく軌道に乗り始めたところだ。

家に戻ると、郵便受けに町役場からの封筒が入っていた。

差出人は「水岐町教育委員会」となっている。

「何これ？」

「ああ、それか」祖父が苦笑いした。「町史編纂の手伝いをしてくれて話じゃ。お前が編集の仕事しとるって聞いて」

封筒を開けると、丁寧な文字で書かれた手紙が入っていた。町制施行五十周年を記念して町史を編纂することに、編集経験者を探していること。短期間でも構わないので協力してほしいということ。

「誰が私のこと話したの？」

「わしじゃ。町の若い衆に頼まれてな」

紗月は手紙を読み返した。報酬も書いてある。東京の編集者の給料と比べれば安い、生活するには十分な金額だった。

紗月は川沿いを歩いていた。夕暮れの長良川は、子供の頃と変わらず美しい。対岸に鵜飼の船が見える。観光シーズンではないが、練習だろうか。篝火が川面を照らし、鵜匠の影が踊る。その光景を見ていると、不思議な感情が湧き上がった。懐かしさと、同時に切なさ。この町の記憶を残すこと。それは意味のあることなのだろうか。川の音を

聞きながら、紗月は考えた。東京に戻るか、それともしばらくここに留まるか。答えは、まだ見えなかった。しかし心の奥で、何か動き始めているのを感じていた。

翌朝、紗月は町役場を訪れた。昭和四十年代に建てられた古い建物で、廊下に足音が響く。教育委員会は二階の奥にあった。

「稲葉さんですね、お待ちしていました」出迎えたのは、三十代前半の男性職員だった。名札には「企画課 真柴正吾」とある。背が高く、真面目そうな顔立ちをしている。眼鏡をかけた知的な印象で、役場職員としては珍しく若々しい雰囲気を見せていた。

「町史編纂の件でお電話いただきました」

「ありがとうございます。実は、人手不足で困っていたんです」真柴は苦笑いしながら、奥の部屋に案内した。「町史編纂室」と書かれたプレートが掛かっている。部屋に入ると、古い資料が山積みになっていた。段ボール箱、ファイル、古い写真、地図。埃っぽい匂いが鼻をくすぐる。

「これ、全部町史の資料ですか？」

「そうです。明治時代から現在まで、とりあえず集められるものは全部集めました」

真柴が箱の中身を見せてくれる。戦前の写真、戦後の復興記録、高度経済成長期の開発計画書。町の歴史が詰まっ

ている。しかし、整理されずに積み重ねられただけで、まるで宝の山を前にして途方に暮れているような状況だった。

「でも、整理が追いつかなくて。それに」真柴は声を潜めた。

「何を載せて、何を載せないか、議論になってまして」

「というと?」

「観光協会の方々は、町のイメージを良くする内容を重視したがります。一方、古老の方々は、災害の記録も含めて事実をありのまま残したいと」

なるほど、と紗月は思った。どの町史にもある問題だろう。

何を「公式の歴史」とするかの線引き。美化された歴史か、ありのままの現実か。その狭間で、編纂者は苦悩する。

「私にできることは?」

「まずは資料の整理と分類。それから古老の方々からの聞き書き。紗月さんは地元出身で編集経験もあるから、お願いできればと」

紗月は部屋を見回した。確かに大変な作業になりそうだが、やりがいもありそうだった。東京での機械的な編集作業とは違う、人間の温もりを感じる仕事。

「わかりました。しばらくお世話になります」

そこへ高校生らしい女の子がやって来た。ショートカットで活発そうな印象を受ける。

「あ、リオちゃん」真柴が手を振った。

「紹介します。鷺原リオさん、水岐高校の三年生です」

「こんにちは」リオは元気よく頭を下げた。

「インスタで町の写真をアップしてるんです」

リオのスマートフォンを見せてもらうと、確かに町の風景が美しく撮影されている。鶉飼の篝火、古い町並み、川沿いの桜。フォロワーも千人を超えている。若い感性で捉えられた水岐町は、確かに魅力的に見えた。

「すごいじゃない。写真、上手ね」

「ありがとうございます。でも最近、ネタ切れで困ってるんです」

「町史編纂の手伝いもしてくれてるんです」真柴が説明した。

「若い人の視点も大切ですから」

紗月はリオに興味を持った。同じ町の出身でも、世代が違えば見えるものも違うだろう。

「リオちゃん、この町のどんなところが好き?」

「川と山がきれいで、人が優しいところです。でも」リオは少し困った顔をした。「正直、つまらないって思うこともあります。何もなし、若い人はみんな出て行っちゃうし」

率直な意見だった。紗月も同じことを感じていた。

「でも、歴史を調べてみると、面白いことがたくさんあるのよ」その日から、紗月の町史編纂室での日々が始まった。午前中は病院に母を見舞い、午後から資料整理に取り組む。

古い写真を見ていると、知っている顔を見つけたことがある。若い頃の祖父や、亡くなった祖母。商店街で店を営んでいた人たち。彼らの表情は生き生きとして、町に活気があった時代を物語っている。特に興味深かったのは、昭和四十年代の開発計画書だった。長良川にダムを建設する計画があったらしい。

「このダム計画、実現しなかったんですか？」真柴に尋ねると、彼は困った顔をした。

「ええ、住民の反対で中止になりました。でも、その経緯を詳しく載せるかどうか、議論になっています」

「なぜですか？」

「当時、町は推進派と反対派に分かれて、かなり険悪な関係になったらしくて。今でもその時の感情を引きずっている人がいるんです」

古い新聞記事を読むと、確かに激しい論争があったことがわかる。ダム推進派は「町の発展のため」と主張し、反対派は「自然と伝統を守るため」と訴えた。最終的に環境への影響を懸念して計画は中止されたが、町の人々の間に深い溝を残したらしい。

「これ、載せない方向で話が進んでいるんですか？」

「観光協会の意向もありまして――」真柴の歯切れが悪い。観光客に来てもらうために、町の負の歴史は隠したいという

ことだろう。

帰宅後、紗月は祖父にダム計画のことを聞いてみた。

「おじいちゃん、昔ダムを作る話があったって本当？」

祖父の箸が止まった。「なんでそんなこと聞く？」

「町史の資料で見つけたの」

長い沈黙の後、祖父がぼつりと言った。

「あの時は大変じゃった。家族も、友人も、みんなバラバラになった」

「おじいちゃんはどうだったの？」

「わしは」祖父はそれ以上語らなかった。でも、その表情に深い悲しみが浮かんでいるのを、紗月は見逃さなかった。

「小菅新田って場所、知ってる？」編纂室で古い戸籍を調べていたリオが、紗月に尋ねた。

「小菅新田？」紗月は首を振った。聞いたことのない地名だった。

「大正時代の戸籍に出てくるんです。でも、現在の地図にはないんです」リオがパソコンの画面を見せた。確かに「小菅新田」という記載があるが、現在の住所表示には該当するものがない。

「消えた集落かもしれないですね」真柴が資料を調べながら言った。「昨日見つけた洪水で流された村と関係があるか

も」

三人は午後から現地調査に出かけることにした。古地図を頼りに、小菅新田があったと思われる場所を探す。長良川の河川敷を歩いていると、コンクリートで固められた護岸の向こうに、古い石垣の一部が見えた。

「あれ、何でしょう?」リオがスマートフォンで写真を撮る。石垣は苔に覆われ、明らかに長い間放置されている。

「家の基礎かもしれません」紗月が近づいて観察した。「石の組み方が古い手法ですね」

石垣の周りを調べると、陶器のかけらがいくつか見つかった。茶碗や皿の一部らしい。

「生活用品ですね。ここに人が住んでいた証拠です」真柴がかけらを拾い上げた。「でも、いつ頃のものか分からないな」

その時、釣りをしていた老人が声をかけてきた。「あんたら、何してるんだ?」

「すみません、町史編纂の調査で」真柴が説明した。

「町史?」老人は興味深そうに近づいてきた。「わしは宮田うちゅうもんじゃが、この辺りに詳しいで」

宮田さんは七十代後半で、子供の頃からこの辺りで遊んでいたという。

「この石垣な、昔からあった。わしの爺さんが言うところじゃが、ここには昔、家があったらしい」

「いつ頃まで?」

「戦前までじゃな。大きな洪水があつて、みんな高台に移つたて聞いた」

宮田さんの話では、小菅新田は江戸時代に開拓された新田集落で、二十軒ほどの農家があった。しかし、大正十二年の大洪水で壊滅し、住民は現在の市街地に移住したという。

「その話、詳しく聞かせてもらえませんか?」紗月がお願いすると、宮田さんは快く応じてくれた。

「じゃあ、今度うちに来てくれ。爺さんから聞いた話、まだ覚えとるで」

翌日、三人は宮田さんの家を訪ねた。古い農家で、囲炉裏もある。お茶を出してもらいながら、宮田さんの話を聞いた。

「小菅新田はな、川に近いから土が肥えとつて、米がようけ穫れたんじゃ。でも、その分、洪水の被害も大きかった」

宮田さんの祖父の話によると、明治時代には何度も洪水に見舞われ、その度に家を建て直していたという。しかし、大正十二年の洪水は特に規模が大きく、集落全体が流されてしまった。

「家も田んぼも、全部なくなった。みんな着の身着のまままで逃げたんじゃ」

「その後、住民の方はどうされたんですか？」

「町の人たちが助けてくれてな。空き家を提供してくれたり、仕事を世話してくれたり。みんな支え合って生きてきたんじゃない」

宮田さんは古いアルバムを取り出した。白黒写真に写っているのは、洪水直後の様子だった。泥に埋まった田んぼ、壊れた家屋、避難している人々。

「これ、貴重な記録ですね」

「爺さんが大切にしようとたんじゃ。忘れちゃいかんって言って」

写真には「大正十二年九月 小菅新田水害」と記されている。

「この写真、町史に使わせていただけませんか？」

「もちろんじゃ。こういう歴史こそ、残さないといかん」

宮田さんの協力で、小菅新田の歴史が明らかになってきた。江戸時代の開拓から大正時代の壊滅まで、一つの集落の興亡が浮かび上がる。

編纂室に戻って資料を整理していると、真柴が困った顔をした。

「この話、町史に載せるのは難しいかもしれません」

「なぜですか？」

「観光協会の方針で、災害関連の記述は控えめにしように」

また壁にぶつかった。事実を記録すること、町のイメージを守ること。その狭間で、何を選ぶべきなのか。

その夜、紗月は祖父に小菅新田の話をした。

「小菅新田か。懐かしい名前じゃな」

「おじいちゃん、知ってるの？」

「わしの父親がな、あそこの出身じゃった」

紗月は驚いた。自分にそんな繋がりがあったとは。「お父

さんも洪水に遭ったの？」

「ああ。十五の時じゃった。家も田んぼも全部流されて、こ

の町に出てきたんじゃない」

祖父の父、紗月の曾祖父の話だった。

「それで鵜匠に？」

「最初は大工の手伝いじゃった。でも、鵜飼に興味があつてな。

師匠について修行したんじゃない」

一つの災害が、家族の歴史を変えた。もし洪水がなければ、曾祖父は農民のまま小菅新田で暮らし、祖父も鵜匠にはならなかっただろう。そして紗月の人生も、違ったものになっていたかもしれない。

「その話、町史に載せていいかな？」

「構わんよ。でも」祖父は少し考えてから言った。「全部話すにはまだ早いかもしれん」何か他にも隠していることがあるらしい。祖父の表情に、深い悲しみが浮かんでいた。

六月に入ると、梅雨が本格化した。天気予報では、記録的な大雨になる可能性がある」と報じている。

「また小菅新田みたいなことになるんでしょうか」リオが心配そうに言った。町内放送では、川沿いの住民に注意を呼びかけている。

「大丈夫。今は気象予報も避難システムも格段に良くなっている」真柴が答えたが、表情は不安そうだった。役場では災害対策本部の準備が進んでいる。そんな中、町史編纂をめぐる議論も激しくなっていた。住民説明会が開かれ、町内会長、老人会の代表、商工会議所の役員など、約二十人が集まった。

「町史の内容について、住民説明会を開きます」町長が挨拶した後、真柴が資料を配って説明を始めた。章立て、収録予定の写真、古老からの聞き書き内容。順調に進んでいることを強調している。

「質問はありませんか？」
すぐに手が上がった。七十代の男性で、商工会の元会長だった。

「災害の記録はどの程度載せるんですか？」
真柴が答えに困っていると、観光協会の事務局長が口を開いた。

「必要最小限に留める方針です。観光振興に配慮して」

すると、別の老人が立ち上がった。「それはおかしい。災害も町の歴史の一部じゃないか」

「でも、観光客が心配するでしょう」

「観光客のために歴史を変えるのか？」

会場がざわめき始めた。紗月は緊張した。

「皆さん、落ち着いて」町長が制止しようとしたが、議論は激しくなる一方だった。

「ダム計画のことも隠すつもりか？」

「あの時の対立をまた蒸し返すのか？」

「事実は事実だろう」

「町の恥を晒すのか？」

紗月は立ち上がった。「すみません、私から一言」

会場が静かになった。

「町史は誰のためのものでしょうか。観光客のためですか、それとも町民のためですか？」

「当然町民のためだ」一人の老人が答えた。

「でも観光も大事だろう」別の人が反論した。

「だったら、両方を大切にする方法を考えませんか？」紗月は持参した資料を取り出した。

「小菅新田という集落をご存知の方はいますか？」

数人が手を上げた。

「大正時代の洪水で流された村です。でも、住民は諦めず

に新しい場所で生活を再建した。これは災害の記録であると同時に、町民の強さを示す記録でもあります」会場は静まり返った。「ダム計画についても同じです。確かに町は二分されましたが、最終的には話し合いで解決した。民主主義が機能した証拠でもあります」

一人の老人がゆつくりと手を上げた。「その通りかもしれません。わしらは災害から立ち直ってきた。それは誇りでもある」

「でも観光への影響は？」商工会の役員が心配そうに言った。

そのとき、後ろの席からリオが立ち上がった。「すみません、発言してもいいですか？」

町長が頷くと、リオは前に出た。

「私、インスタで町の写真を投稿してるんですが、小菅新田の話はとて反響がありました」スマートフォンを取り出して画面を見せる。「『困難を乗り越えた歴史に感動した』『ぜひ現地を見たい』というコメントがたくさんついています」

会場がどよめいた。

「隠すよりも、ちゃんと伝えた方がいいんじゃないでしょうか。その方が、本当の意味で町を好きになってもらえると思います」

リオの言葉に、何人かが頷いた。

「なるほど、そういう見方もあるか」

「若い人の意見も聞くべきだな」

説明会は結論が出ないまま終わったが、議論は必要だということまで一致した。しかし、その夜から雨が激しくなった。夜になって大雨警報が発令され、川の水位が急激に上昇している。紗月は編纂室で資料の整理をしていた。もし浸水すれば、貴重な町史資料が台無しになる。

「一人で何してるの？」真柴が心配して様子を見に来た。

「資料を二階に運ぼうと思って」

「手伝います」二人で古い写真や文書を安全な場所に移した。その中には、小菅新田の写真もあった。

「この写真、大切にしてくださいね」

「もちろんです」作業をしながら、真柴が言った。「観光協会の圧力、きついでしょ？」

「うん。でも、曲げたくないの」

「僕は稲葉さんの判断を支持します。たとえ観光に影響があっても」

真柴の言葉に勇気づけられた。

深夜、川の水位は危険水位に達した。町内放送で避難勧告が出される。紗月は実家に戻った。祖父と母は既に二階で待機していた。

「大丈夫か、紗月」

「うん。資料は安全な場所に移したから」

窓の外では、激しい雨が降り続けている。川の音がいつもより大きく聞こえる。

「昔を思い出すのう」祖父が呟いた。

「曾祖父さんの時のことを？」

「そうじゃ。あの時も、こんな音がしとった」祖父の表情は複雑だった。過去の記憶と現在の不安が入り交じっている。

「でも、今は昔と違う。避難システムもあるし、気象情報も正確だ」

母が祖父を励ました。

午前三時頃、川の水位がさらに上昇した。消防団が巡回し、危険地域の住民に避難を呼びかけている。紗月は眠れずに窓から外を見つめていた。街灯が雨に煙って見える。ふと、小菅新田の曾祖父のことを思った。あの夜も、きっとこんなふうにも雨が降っていたのだろう。そして、重い決断を迫られた。「もし私が曾祖父さんの立場だったら、正しい判断ができたろうか」自問自答してみるが、答えは出ない。災害の前では、人間は常に限られた情報の中で決断を迫られる。

朝になって、雨は少し弱くなった。しかし、川の水位はまだ高い状態が続いている。町の被害状況を確認しに行くと、幸い大きな浸水は免れていた。しかし、川沿いの道路は一部冠水し、交通に支障が出ている。編集室も一階部分が

浸水し、一部の資料が水に浸かっていた。幸い、古い写真や文書の多くは事前に二階に運んでいたため、被害は最小限に抑えられた。

「資料、大丈夫でしたか？」リオが心配そうに尋ねた。

「大部分は無事よ。でも、一部は修復が必要ね」濡れた資料を一枚ずつ乾燥させながら、紗月は考えていた。災害の記録も、町史の大切な一部だ。今回の豪雨も、将来の教訓として残さなければならぬ。

午後、観光協会の田中会長がやってきた。浸水被害で疲れ果てた様子だった。

「稲葉さん、お疲れさまです」

「田中さんも大変でしたね」

「実は、お詫びがあります。小菅新田の件で、記述を削除しろと言ったこと、取り消させてください」

紗月は驚いた。「なぜです？」

「昨夜の豪雨を経験して考えが変わりました。過去の災害を隠すより、教訓として伝える方が大切だと思っただけです」田中会長の表情は真剣だった。「今回の豪雨も、観光には大きな痛手です。でも、それを隠すより、災害に強い町づくりをアピールした方がいいかもしれません」

「そうですね。防災も町の魅力の一つになりますから」紗月は田中会長の変化を歓迎した。災害は確かに辛い体験だ

が、それを乗り越える力も町の財産だ。

豪雨から一週間が経った頃、祖父が紗月を呼んだ。

「話したいことがある」

二人で川沿いを歩きながら、祖父は重い口を開いた。

「実は、まだ話してないことがあるんじゃない？」

「何？」

「小菅新田の洪水の時、わしも一緒にあった」

紗月は驚いた。「一緒につて？」

「まだ子どもじゃったが、父親について回った。避難誘導の手伝いをしてたんじゃ」祖父は立ち止まって、川を見つめた。「父親が判断に迷ってるのを、間近で見てた。雨がひどくなってきて、川の水も上がってきて。でも、まだ大丈夫かもしれないと思ってた」

「それで？」

「わしが『もう少し様子を見ましょう』と言ったんじゃない」祖父の声が震えた。

「子どものくせに、生意気なことを言った。父親は迷ったが、わしの言葉を聞き入れて、避難指示を遅らせた」

衝撃的な告白だった。判断の遅れには、祖父も関わっていたのだ。

「だから、わしにも責任がある。父親だけの責任じゃない」

「おじいちゃん——」

「七十年以上、そのことが頭を離れん。もしあの時、『すぐに避難しましょう』と言っとれば」

紗月は祖父の肩を抱いた。「それは子どものあなたの責任じゃないよ」

「でも、言葉には力がある。わしの一言が、判断を左右したかもしれない」

長い沈黙が続いた。川の水が、静かに流れている。

「なぜ今、話してくれたの？」

「記憶展で、あの子が質問してきたらどう？『悪い人なの？』って」祖父は涙を拭いながら続けた。「あの時思ったんじゃない。隠し続けるのは、もうやめようって。真実を話さんと、父親も浮かばれん」

「町史に載せる？」

「それはお前が決める。でも、わしはもう隠さん。聞かれたら、本当のことを話す」

そのとき、川沿いで散歩していた古老の一人、鈴木清一さんに出会った。八十七歳の鈴木さんは、小菅新田のことをよく知っていた。

「避難が遅れた話は聞いた。でも、責めるもんなんおらんかった。誰も悪くないんじゃない。自然災害は人間にはどうしようもない」

「でも、もっと早く判断していれば」

「そんなこと言い出したら切りがない。後から考えれば、何だつて改善できる」

鈴木さんの言葉は重かった。

「稲葉の旦那さんも苦しんだのう。でも、あの人は立派な鵜匠になった。それが一番の供養じゃったと思う」

紗月は祖父の気持ち少し分かったような気がした。

その夜、紗月は一人で考え込んだ。祖父の新たな告白をどう受け止めるべきか。個人の責任と歴史の記録、そのバランスをどう取るべきか。

翌日、母と相談した。

「おじいちゃんから聞いたの。もう隠したくないって」

母は静かに答えた。「おじいちゃんも、ずっと苦しんだ。

でも、それは子どもの頃の話でしょ？ 責められるようなことじゃない」

「でも、本人は責任を感じてる」

「人間って、そういうものよ。関係のないことでも、自分を責めてしまう」母の言葉は温かかった。「でも、話してくれたいということは、信頼されてるってことよ。その気持ちを大切にしなさい」

九月下旬、紗月は町民ホールで「記憶展」を開催するこ

とを提案した。町史編纂「記憶編」を発行する前に、町民に内容を見てもらう企画だった。

「記憶編を発行する前に、町民の皆さんに内容を見てもらいませんか」

町長も賛成した。透明性のある編纂作業として、良いアピールになる。準備は大変だった。古い写真の拡大印刷、証言文の展示パネル作成、年代順の配置構成。リオと真柴が手伝ってくれた。展示の目玉は、小菅新田の復元模型だった。祖父の記憶と古い地図を元に、洪水前の集落を再現した。

「すごいじゃない」母も感動していた。

「おじいちゃんの話聞いて作ったのね」

祖父は模型を見つめながら、静かに涙を流していた。

「懐かしいのう。子どもの頃、よく遊びに行った場所じゃ」

記憶展の開催が近づく、町の関心も高まった。特に高齢者の間で話題になった。

「自分の証言が展示されるなんて」

開催当日、町民ホールには予想を上回る人々が集まった。平日にも関わらず、二百人を超える来場者があった。年配の人たちは、懐かしそうに古い写真を見つめていた。若い人たちは、知らなかった町の歴史に驚いていた。

「へえ、昭和三十年代はこんなに商店街が賑やかだったんだ」
「戦時中は、こんなに大変だったのね」

世代を超えた対話が生まれていた。小菅新田のコーナーでは、多くの人が足を止めた。復元模型と被災前後の写真、そして曾祖父に関する記述。

「稲葉の旦那さんは、本当に苦労されたんですね」年配の男性が祖父に声をかけた。「でも、立派に責任を果たされた。みんな感謝してますよ」

祖父は深く頭を下げた。長年の重荷が、少しずつ軽くなっているように見えた。

展示会場では、新たな証言も集まった。

「この写真に写ってる人、私の祖父です」

「この建物、うちの店だった」

「この祭りの様子、もっと詳しく話せます」

記憶展は、さらなる記憶を呼び起こす触媒の役割を果たしていた。

会期中、印象的な出来事があった。小学生の男の子が、曾祖父の展示を見て質問してきた。

「このおじいさんは、悪い人なの？」

紗月は膝を折り、視線を合わせて答えた。「悪い人じゃないのよ。とても責任感の強い、優しい人だった」

「でも、人が死んじゃったんでしょ？」

「そうね。でも、それは災害が起きたからよ。おじいさんは、みんなを助けようと一生懸命だった」

男の子は考え込んでいた。「分かった。みんなを守ろうとしてくれたんだね」

その純真な理解に、紗月は胸が熱くなった。

記憶展の最終日、来場者数は五百人を超えた。小さな町としては、驚異的な数字だった。

閉会式で、紗月は挨拶した。

「皆さんのおかげで、素晴らしい記憶展になりました。町史は公式な記録だけでなく、皆さん一人一人の記憶によって作られるのだと実感しました」

会場から温かい拍手が送られた。

「記憶編の発行は十二月を予定しています。町の歴史を、みんなで共有していきましょう」

記憶展は大成功だった。しかし、それ以上に大切だったのは、町民同士の絆が深まったことだった。

記憶展が終わってから、町史編纂は新たな段階に入った。

従来の公式記録だけでなく、町民の記憶や体験談も含めた「多声的な町史」を作ることが決まった。

「公式記録だけでなく、町民の記憶や体験談も含めた『多声的な町史』を作りたいんです」紗月は町長に提案した。

「それは前例がないのでは？」

「でも、今回の記憶展で分かったんです。町の歴史は、公式記録だけでは語りきれません」

紗月は集まった写真や証言の資料を示した。「これらの記録も、町の大切な財産です。多様な視点から町の歴史を描けば、より豊かな町史になると思います」

町議会では賛否両論があった。保守的な議員からは反対意見も出たが、若い議員からは支持する声もあった。最終的に、メインの町史は従来通り作り、それに加えて町民の証言や写真を集めた「記憶編」を別に作ることにした。両方のニーズを満たす妥協案だった。記憶編の制作が決まると、町民の協力が一気に広がった。

「私の父の戦争体験談、載せてもらえますか」

「昭和の商店街の写真があります」

「子どもの頃の川遊びの思い出を書きました」

様々な記憶と記録が集まった。年代も内容も多岐にわたる。編集作業は想像以上に大変だった。個人的な記憶は、往々にして主観的で、事実確認が困難だった。

「この証言、他の記録と食い違ってます」リオが困った顔をしていた。

「完璧に事実確認はできないかもしれないね。でも、それも含めて『記憶』なんだと思う」紗月は割り切った。客観的

事実と主観的記憶は違うものだ。どちらも町の歴史の一部として価値がある。

作業を進める中で、興味深い発見があった。同じ出来事でも、人によって全く違う記憶を持っていることがあった。昭和四十年代の商店街の様子について、「活気があって楽しかった」という証言と「寂れて寂しかった」という証言が両方あった。

「どちらが正しいんでしょう？」

「どちらも正しいのよ。見る角度が違うだけ」

紗月は気づいた。歴史は一つの「真実」ではなく、複数の「真実」の集合体なのかもしれない。

八月の中旬、「記憶編」の構成がほぼ固まった。時代別に章立てし、それぞれの時代について公式記録と個人的証言を併載する形にした。小菅新田の章では、曾祖父の話も含めた。ただし、個人を糾弾するのではなく、災害時のリーダーシップの困難さと人間の限界について、教訓として記述した。祖父にも原稿を見せた。

「これでいい。父親も喜ぶと思う」

承認をもらえて、紗月は安堵した。しかし、新たな問題が浮上した。「記憶編」に興味を示したのは、町外のメディアだった。

「画期的な取り組みですね。取材させてください」新聞社

からの申し出だった。注目されるのは嬉しいが、町が観光地として有名になることで、新たな問題が生じる可能性もある。

「どうでしょうか」真柴に相談した。

「適度な注目は町のためにもなるでしょう。でも、過度な観光化は避けたい」

バランスの取れた対応が必要だった。結局、地元紙での紹介に留めることにした。全国的な注目は時期尚早だと判断した。

一方で、SNSを通じて全国から情報が集まり始めた。リオのInstagramが話題になり、町外からも多くの問い合わせがあった。

「私の祖母が小菅新田出身でした。写真があります」

町外に住む女性から連絡があった。送られてきた写真には、洪水前の小菅新田の風景が写っていた。

「これは貴重ですね」真柴も驚いていた。役場の資料にもない写真だった。他にも、戦時中の町の様子を記録した日記、昭和初期の祭りの写真、古い商店街の記録などが、SNSを通じて寄せられた。

「すごいな。こんなにたくさんさんの記憶が散らばって存在してたんですね」リオは目を輝かせていた。

「みんな、町の歴史を大切に思ってるのね」紗月も感激した。

公式な記録だけでは捉えきれない、人々の暮らしや思い出が浮かび上がってくる。

十一月になり、紗月は重要な決断を迫られていた。東京の出版社から、復職の打診があったのだ。

「どうします？」真柴が心配そうに尋ねた。

「まだ決めてない。町史編纂も終わってないし」

「でも、いつかは決断しないといけませんね」

確かにそうだった。母の病状は安定しているし、町史編纂も順調に進んでいる。帰郷当初の目的は、ほぼ達成されていた。リオに相談すると、意外な答えが返ってきた。

「紗月さんは東京に戻った方がいいと思います」

「なぜ？」

「ここで学んだことを、もっと大きな場所で活かせるんじゃないですか」リオは大人っぽい考えを示した。「私は町に残って、記憶の記録を続けます。でも、紗月さんには違う役割があると思う」

その言葉に、紗月はハツとした。確かに、地方での経験を都市部で活かすという道もある。祖父に相談すると、予想通りの答えが返ってきた。

「お前の人生じゃ。好きにすればいい」

「でも、町史編纂が」

「それはリオちゃんや真柴君に任せればいい。お前は十分やったよ」祖父の表情は穏やかだった。「都会で頑張ってくるんじゃない。でも、時々は帰ってこいよ」

母も同じ意見だった。「あなたにはもっと大きな舞台が似合うわ。ここでの経験を無駄にしちゃだめよ」

結論は出た。十二月末で町史編纂の仕事を終え、翌年一月から東京に戻ることにした。

決断を町に発表すると、様々な反応があった。寂しがる声もあれば、激励の声もあった。記憶展でお世話になった町民たちが、送別会を開いてくれた。

「紗月ちゃんのおかげで、町の歴史が形になった」

「記憶編、楽しみにしてます」

温かい言葉をたくさんもらった。送別会で、祖父が挨拶に立った。

「紗月は小さい頃から、好奇心の強い子じゃった。いろんなことを知りたがって、よく質問してきた」会場が静まり返った。

「今回、町史編纂を通じて、町のことを深く知ってくれた。わしは嬉しい」祖父の声が震えた。

「都会に戻っても、この町のことを忘れんでくれ。お前は、町と外をつなぐ架け橋じゃ」

拍手が鳴り響いた。紗月は涙を抑えきれなかった。

十二月中旬、「記憶編」が完成した。三百ページの重厚

な本になった。表紙には、長良川と鶴飼舟の写真を使った。発行部数は限られていたが、町民の関心は高かった。初回印刷分は、あつという間に予約で埋まった。

「すごいじゃないですか」真柴が喜んだ。

「みんなが協力してくれたおかげよ」

リオも嬉しそうだった。「私たちで作った本ですね」

記憶編の贈呈式では、町長から感謝状をもらった。

「稲葉さんの功績は、町史編纂にとどまりません。町民同士の絆を深め、地域の記憶を共有する文化を作ってくれました」

過分な評価だと思ったが、素直に受け取った。

式の後、小さなパーティーが開かれた。町史編纂に関わった人々が集まった。

「今後の町史編纂はどうなるんですか？」年配の女性が質問した。

「リオさんが引き継いでくれます」紗月が答えた。

「え、私ですか？」リオが驚いた。

「あなたが一番適任よ。SNSの活用も上手だし、町の人たちとの関係も良い」

真柴も賛成した。「町としても、若い人に引き継いでもらえるのは心強いです」

リオは責任の重さに戸惑っていたが、やがて決意を固めた。

「頑張ります。紗月さんが始めてくれたことを、続けていきます」

それから二年が経った。紗月は東京で順調にキャリアを積み、地方文化の専門編集者として認められていた。水岐町での経験は、仕事にも活かされた。地方の実情を理解した編集者として、重宝された。

「地方には、まだまだ発掘されていない文化や歴史がありませんね」新しい上司は理解があった。「そういう視点を持った編集者が必要なんです」

春になり、紗月は水岐町の取材記事を雑誌に掲載した。記憶編の取り組みを中心とした、地方文化の継承に関する記事だった。反響は大きく、他の地域からも問い合わせがあった。

「私たちの町でも、同じような取り組みをしたい」

「記憶編の作り方を教えてください」

紗月は嬉しかった。水岐町の経験が、他の地域の参考になっている。その頃、リオから連絡があった。

「記憶編の第二版を作ることになりました」

「すごいじゃないか」

「新しい証言がまた集まったんです。今度は戦後復興期の記録が中心です」

リオは着実に町史編纂を続けていた。SNSを活用した情報収集も、さらに精度を上げていた。

「紗月さんの方法を参考にしながら、私なりの工夫も加えています」

若い感性による新しいアプローチが、町民にも好評だった。

五月の連休に帰郷した時、町の変化に驚いた。記憶編が話題になり、歴史に関心を持つ観光客が増えていた。しかし、従来の観光地とは違う、落ち着いた雰囲気を保っていた。

「質の高い観光客が増えました」真柴が報告した。

「歴史や文化に関心のある人たちです」

商店街でも、記憶編に関連した展示や商品が見られた。

「昔の写真を使った絵葉書が人気です」

「地元食材を使った『昭和の味』メニューも好評で」

観光と文化保護のバランスが、うまく取れているようだった。

祖父も元気だった。記憶編の影響で、鵜飼に関する質問をされることが増えたという。

「今まで話したことのない詳しい技術について、聞いてくる人がおる」

「嬉しいでしょう?」

「まあな。でも、ちゃんと答えないといかんから、責任も感じる」

祖父なりに、文化の伝承者としての使命感を持っていた。

川沿いを歩いていると、新しい石碑を見つけた。「小菅新田慰霊碑」と刻まれている。

「いつの間に?」

「町の有志で建てました」真柴が説明した。

「記憶編の影響で、きちんと慰霊すべきだという声が上がったんです」

碑の前には、新しい花が供えられていた。祖父だけでなく、町民も供養に訪れているようだった。

「良いことね」紗月は心から思った。隠された歴史が明らかになり、適切に弔われている。

その夜、家族三人で夕食を取った。

「お前が帰ってきてくれて、本当に良かった」祖父がしみじみ言った。

「たった一年だったけど、大きな変化があった」

「私はきっかけを作っただけよ。みんな力で力を合わせた結果」

「でも、そのきっかけが大切じゃった」

母も同感だった。「町の人たちの表情が明るくなった。自分たちの歴史に誇りを持てるようになったのよ」

東京に戻る前に、リオと会った。

「これからも、町史編纂を続けてくれる?」

「はい。でも、紗月さんのようにはいかないかもかもしれません」

「あなたはあなたなりの方法でいいの。私にできないことも、あなたならできるはず」

リオの目が輝いた。「SNSを使って、全国の同世代の人たちとも交流したいんです。町の歴史を、もっと広い視野で捉えられるかもしれません」

素晴らしいアイデアだった。

「応援してる。困った時はいつでも連絡して」

「ありがとうございます。紗月さんも、東京で頑張ってください」

それから二年後の春の終わり、紗月は久しぶりに長期休暇を取って帰郷した。川沿いを歩くと、懐かしい匂いがした。

水の匂い、草の匂い、そして炭火の匂い。

「変わらないなあ」

でも、よく見ると小さな変化がある。新しい案内板、整備された遊歩道、そして観光客の姿。適度な発展を遂げながら、町の本質は保たれている。

夕暮れ時、鵜飼が始まった。篝火が川面を照らし、鵜が水中に潜る。観光客の中に、熱心にメモを取っている若い女性がいた。

「何か研究をされてるんですか?」声をかけると、大学院生だった。

「民俗学を専攻してて、伝統文化の継承について調べています」

「この町の記憶編をご存知ですか？」

「もちろんです。素晴らしい取り組みだと思います」

学術的にも評価されていることを知り、紗月は嬉しかった。

鵜飼舟の上で、祖父が鵜を操っている。その姿は、百年前から変わらない。でも、その意味は変わった。隠された罪悪感ではなく、町の文化を誇りを持って伝える使命として、鵜飼に向き合っている。川岸で、紗月は静かに呟いた。

「川は記憶を抱いている」

流れる水は常に新しいが、川という存在は昔から続いている。町の記憶も同じだ。個々の記憶は移ろいでも、集合的な記憶として受け継がれていく。

翌日の朝、編纂室を訪ねた。リオが一人で作業していた。

「紗月さん！ お帰りなさい」

部屋には新しい資料が整理されていた。戦後復興期、高度成長期、バブル時代。町の記憶は着実に蓄積されている。

「大変でしょう？」

「でも、やりがいがあります」リオは充実した表情だった。

「最近は、他の町からも相談されるようになりました」

水岐町の記憶編が、モデルケースとして注目されているの

だ。

「全国から視察に来る人もいます。紗月さんが始めてくれたことが、こんなに広がるなんて」

紗月は感慨深かった。小さな町で始まった取り組みが、大きな影響を与えている。

午後、町民ホールで講演会があった。リオが町外の研究者を招いて開催したものだ。「地域の記憶をどう継承するか」というテーマで、各地の事例が紹介された。水岐町の取り組みも、代表例として取り上げられた。聴衆の中には、町民だけでなく他地域からの参加者もいた。小さな町が、文化継承の先進地域として認められているのだ。

講演後、町長と話した。

「稲葉さんのおかげで、町の知名度が上がりました。でも、それ以上に大切なのは、町民の誇りが戻ったことです」

確かに、町の人々の表情は明るくなっていた。自分たちの歴史と文化に自信を持っている。

「これからも、バランスを保ちながら発展してってください」

夕方、祖父と二人で川を見つめた。

「お前が帰ってきて、本当に良かった」

「おじいちゃんも、真実を話してくれて良かった」

「隠していた頃が、嘘みたいじゃ。今は堂々と鵜飼ができる」祖父の表情は穏やかだった。「町の若い人たちも、鵜飼に興

味を持つてくれるようになった。技術を伝える相手がおるのは嬉しい」

文化の継承が、確実に次世代に引き継がれている。

「紗月、一つ聞きたいことがある」

「何？」

「後悔はないか？ 東京で働いて、この町を出て」

紗月は考えた。確かに東京での仕事は充実している。でも、時々この町のことを思う。

「後悔はないよ。でも、ここは私の心のふるさとだから」

「そうか。それでいい」祖父は満足そうに頷いた。

「どこにいても、この町を忘れなくて。川が記憶を抱いているように、お前も町の記憶を抱いてくれ」その言葉が、深く心に響いた。

翌日、東京に戻る前に、小菅新田の跡地を訪れた。慰霊碑の前で、手を合わせた。曾祖父、そして犠牲になった人たちのために。

「ありがとうございました」

小さく呟いた。この町で学んだことを、これから大切にしていこう。川の流れを見つめながら、紗月は確信した。記憶は決して消えない。人から人へ、世代から世代へ受け継がれていく。そして、その記憶が、未来を照らす灯りになる。鵜飼舟が静かに川を下っていく。篝火の光が水面に

映り、幻想的な光景を作り出している。この美しい町で、多くの人が生き、愛し、苦しみ、そして希望を抱いてきた。その記憶すべてが、町の財産なのだ。

紗月は深呼吸した。故郷の空気を胸いっぱい吸い込んで、新たな出発への決意を固めた。

川は記憶を抱いている。そして、人もまた、記憶を抱いて生きていく。長良川の流れのように、記憶もまた絶えることなく流れ続け、次の世代へと受け継がれていく。紗月は、その記憶の川の一部となって、東京という大きな海に向かって流れていく。

しかし、源流である水岐町のことを忘れることはない。川が海に注いでも、その水は再び雲となって空に昇り、雨となって故郷の山に降り注ぐように、紗月の心も常にこの町とつながり続けている。

祖父の鵜飼舟が夜の川を静かに進んでいく。篝火の光が川面に踊り、その光は永遠に消えることなく、町の記憶とともに流れ続けるのだろうか。